一金　百　兩

〔安達清風日記〕

正月廿五日、晴、烈風、礮臺動搖、凡三飯皆沙、釉掩椀而僅食之、乾隆詩曰、半是人膏半是泥、今也半是白沙半是飯、亦一笑、異船無異、終日在礮臺、（欄外）此日、亞王生日、奴輩號炮四五十發、

廿六日、晴、風波烈、如前日、異船無異、終日在礮臺、

廿七日、晴、風波烈、如前日、異船六艘轉于生麥、一艘如前日、終日在礮臺、

米船六艘生麥沖ニ轉ズ

廿八日、晴、和、異船如昨日、終日在臺場、

廿九日、晴、和、異船無異、終日在臺場、

二月朔、晴、和、異船七艘、轉于横濱、終日在礮臺、

七艘横濱沖ニ轉ズ

二日、曇、異船無異、終日在礮臺、

三日、曇、異船無異、終日在礮臺、

此日家信至、北堂府君無恙、和田勝藏、去十七日被東行之　命、

四日、陰晴相半、異船無異、終日在礮臺、此日西信出、

五日、晴、異船無異、終日在礮臺、辰牌、小船一艘、亦來礮臺之下、

米船又一艘來ル

六日、晴、異船無異、終日在礮臺、此日亞墨利伽船一艘、來于猿嶋、午後轉横濱、併前七艘總而八艘、鵜殿大夫至、

家老鵜殿藤輔著陣

七日、曇、晚細雨、異船如昨日、終日在礮臺、平野牧山讓書至、縷々辨坂田精吉水死之實、

八日、曇、終日在礮臺、異船如昨日、此日不時西信至、北堂府君小弟皆無恙、弟聞亞奴跋扈之事、扼腕奮激請東行、佐善新三郎書至、縷々言東都之事情、巳牌、小船來礮臺之下、遲徊數刻、一奴立船頭、笑而揖我輩、既而揚帆而去、船膠于石、我輩大笑、奴輩亦笑而去、自出本藩、漸三十日、心中如過三年、

（欄外）本藩大番騎隊長三員、火器隊長六員、寄班三員、行人四員、其他騎士百七十員、徒士百餘人、歩卒三四百人、被東行之命、期自十七日至廿五日而發本藩、

奴輩頭髮皆寸餘、色皆茶色、ヤキガ子ニテチバマセ居ル、是蓋筒袖ヲ著ル處ノ法、卒皆大黑頭巾ヲイタダキ、我藩谷萬歳ナルモノニ戴クモノ、容貌色白ク、鼻高キ法、鬚亦寸餘、色皆茶、筒袖ノスソヲ折リカエシ、何カ入用ノモノヲ入レ置ク、皆紫ノ切レヲ出シ鼻ヲカム、凡字ヲシルス甚密、紙白紙ノ如シ、バッテーラ船我小船ト大概同シ、唯頭尾小異アリ、頭分ト見エシモノ、 如此頭巾ヲ戴ク、凡バッテーラニ一人宛頭分居ル、

米國兵ノ容貌服裝

〔異國船紀聞〕○雜新史料編纂會所藏本

二月五日、

一今朝因州様御固增御人數出張、左之通、

行列

一行　鐵炮四拾挺 者頭騎馬　弓四拾張 騎馬　長柄五十筋 奉行騎馬

此外歩行立之侍 小具足著、尤火事羽織相用、

同日夕七時頃、

一飛脚早馬こる注進、因州様ゟ著、

同日夜五時頃、

一御同所様御年寄鵜殿藤輔ゟ申仁、本牧へ出張之由、籏棹二本、對鎗二本、持鑓二本、弓鐵(鉄脱カ)等爲持、其身ハ乗物こる相越、外こ役人かご二挺、醫師壹人、此外歩行立之侍數十人相越、

○十日、鳥取藩、大砲十五挺ノ貸與ヲ幕府ニ請フ。尋デ、之ヲ本牧警備地ニ送ル。次ニ其史料ヲ收ム。

大砲ノ貸與ヲ請フ

〔鳥取藩從江戸之日記寫〕 ○縣立鳥取圖書館所藏本

二月十四日、○中略、

一去ル十日、左之趣御懸り御月番松平伊賀守殿ゟ御留守居を以御願セ被成候處、昨晩御同家ゟ御呼出ーこる、左之通御差圖有之候段、御留守居申達之、

此度異國船渡來内海ゟ乗入候付、伺之通不取敢本牧表ゟ相模守人數出張爲仕、當地有合之筒相用罷在、猶不足之分ゟ兼る鑄立申付置候内、追々出來も仕候得共、鑄損ー等も多く、此砌職方差支候趣申出、手後ゟ勝こ相成、差向申分こ相備候儀行屆兼、大切之御場所柄甚以心配仕候、依之可相成儀こ御座候ゟ、別紙之通御筒拜借被　仰付被下度、此段奉願候樣申付候、以上、

二月十日　　賀美隼人

別紙

覺

一御筒　十五挺

貳三百目位ゟ五六百目迄之分

右之通拜借被

仰付被下候樣奉願候事、

二月十日　　御名内（池田慶徳）

御付札

願之通、御筒幷玉藥共拜借被　仰付候間、請取方之儀ゟ御留守居相談候樣可仕候、

○中略、

老中指令

本牧本郷村交附ノ件

安政元年二月五日

一去ル七日、左之趣御勘定奉行松平河内守殿江御留守居ヶ相伺置候處、昨晩御同家ヶ御呼出ーこる、左之御書取を以御答有之候段、同人申達之、

本牧本郷村海岸、相模守警衛御用蒙　仰候付、陣屋幷臺場地所去月十七日御渡被成下候得共、人數差配等不都合之儀も御座候間、本郷村不殘之地所御渡之儀申上候付、猶去月廿九日齋藤嘉兵衛様御手附を以御取調こ付、委細と場所出張之家來ヶ及御答候通、字大谷山幷田畑之内地所、別紙繪圖面朱引之通小屋取建、朱黏之分柵矢來打廻シ申度奉願候、其外小屋場ヶ海岸固場所江之往來道幅狹く候こ付、辨利次第勝手こ道敷取付申度、猶大砲取扱之時宜こ寄、濱手村内共小屋物置等建物取拂候儀も可有之、水主之儀も領分ヶ呼寄候迚も地理不案内之儀ゟ付、土地馴居候獵夫江相應之手當遣ー雇切置、領民同様こ働方申付度、且、持場内江公邊御出役之外、他向ヶ入込候儀と嚴敷制禁仕度、田畑共可成丈踏ミ荒不申様精々心付罷在候得共、自然行屆兼候節も可有之哉と奉存候、其節々御差圖之上取計候様こる と、乍自由差懸り不都合之儀も御座候こ付、右警衛御用中を何卒本郷村不殘之地所御渡被成置被下候様申上候儀こ御座候、右前條之心得を以取計差支無之様被成置被下候と、強る不殘之地所御渡ー被成下候様申上候儀こも無御座候旨、猶又出張役人共ヶ

勘定奉行指令

申越ー候、此段奉窺候、以上、

御名内　賀美隼人

二月七日

相模守警衛被　仰付候、本牧本郷村地内幷水主遣ひ方等之儀こ付、去ル七日心得方奉伺置候趣も御座候處、一昨八日御觸達之御趣意こ候得と、此後要地之見計を以屯致ー置、可成丈ケ外ヶ不見様こ相心得、且、模様こ寄候ハ小船之懸引も可仕儀こ付、精々水主之手當も仕置度、就ると臨時之儀迚も兼ると見込難奉伺置候間、何卒最前申上居候通、相模守人數出張中と其時々諸事差支無之様取計置、追る御屆申上候様仕度、此段急速御差圖被成下候様奉願候、以上、

御名内　山本丹治

二月十日

書面申立之趣と承置候、尤御代官齋藤嘉兵衛ヶ申達候、

十五日、○中略、

一昨十四日之記有之通、此度從

○中略、

安政元年二月五日

公邊依御願御拜借之御筒、明十六日左之通御渡ㇾ相成候間、其手御役人罷出候之様、御留守居申達候付、同人申談、宜取計候様御吟味役江申渡之、

拜借筒數

一五百目鐵張筒　五　挺
　唐銅玉貳百五拾粒
一三百目鐵張筒　拾　挺
　唐銅玉五百粒

○中略、

十六日、○中略、

一岸雲昇弟牧太儀、此度大筒懸り御雇、本牧御場所江出張被　仰付候間、急ニ罷越、心得之儀ヶ、於御場所ニ馬淵官兵衛承合候様、御用人を以申渡之、其段右同人を以申上置之、

一右同人儀、大筒懸り本牧表江出張被　仰付候處、此度御拜借之御筒、明日裏判手ニる同所江御廻ㇾ相成候付、道中右守護被　仰付候間、御吟味役承合罷越候様、御用人を以申渡之、

○中略、

十九日、

一左之御筒、臨時爲御手當、新規出來可被　仰付哉ヶ御吟味役申達承屆、右ニ付公邊御屆之儀、同人申談、宜取計候様御留守居江申渡之、

拜借合藥

一銅六貫目玉筒　壹　挺
一同五貫目玉筒　壹　挺
一同貳百目玉筒　貳　挺
一同百目玉筒　貳　挺

本牧表詰人數

○中略、

廿三日、○中略、

一去ル十六日御拜借ニ相成候御鐵炮付調合藥、左之通今日御渡ニ相成、立合之上、下吟味役江爲請取、無滯只今御屋敷江罷歸候段、御留守居御吟味役申達之、

一調合藥六拾三貫目

○中略、

三月朔日、○中略、

一左之趣、今日御目付永井岩之丞殿江致御屆候段、御留守居申達之、

壹番手

右藤輔自分人數
合百三拾人
但一、騎馬之者五人、
拾匁玉筒　拾五挺
長　柄　十　筋
籏　三　本

籏頭家老
鵜　殿　藤　輔
組騎士　貳拾四人
鐵　炮　四　拾　挺
足　輕　四　拾　人
小頭添

番　頭
加　藤　丹　下
組騎士　拾　八　人

鐵　炮　三　拾　挺
足　輕　三　拾　人
小頭添

番　頭
宮　脇　備　中
備中悴　宮　脇　太　仲
組騎士　拾　八　人
鐵　炮　三　拾　挺
足　輕　三　拾　人
小頭添

船手頭
佐分利軍兵衛
鐵　炮　貳　拾　挺
足　輕　貳　拾　人
小頭添

物頭
永田權之進
鐵炮　貳拾挺
足輕　貳拾人
小頭添
同
永井太郎兵衛
鐵炮　拾挺
足輕　拾人
小頭添
同
米村物集馬
鐵炮　拾挺
足輕　拾人
小頭添

右番頭加藤丹下以下組
騎士之從者夫卒共
百七拾七人
外ニ
相夫玉藥持共
三拾貳人

右駿河自分人數
合百三拾八人
安政元年二月五日

貳番手
旗頭家老
荒尾駿河
組騎士　貳拾三人
鐵炮　三拾挺
足輕　三拾人
小頭添

安政元年二月五日

但一、騎馬之者三人、

拾匁玉筒　拾挺
長柄　拾筋
籏　貳本

船手頭　安倍右膳
鐵炮　貳拾挺
足輕　貳拾人
小頭添
物頭　宮崎平三郎
鐵炮　拾挺
足輕　拾人
小頭添
同

鹽見織衛
鐵炮　拾挺
足輕　拾人
小頭添
同　毛利孫左衛門
弓　貳拾張
足輕　貳拾人
小頭添
同　箕浦東藏
長柄　貳拾五筋
足輕　貳拾五人
小頭添

右船手頭安倍右膳以下

安政元年二月五日

組騎士迄之從者夫卒共
八拾五人
外ニ
相夫玉藥持共
貳拾人
外ニ

目付
伊丹甚太夫
留守居
岡部善右衛門
軍鑑
馬淵官兵衛
留守居助役
山本三七郎
小荷駄奉行

安達辰三郎
作事奉行
山内原祿
場所目付
騎士貳人
大筒懸
騎士貳拾人
但し、右大筒懸人少ニ付、組騎士之内方も出役申付御座候、
醫師三人
祐筆壹人
馬役壹人
目見以上諸役人
拾壹人
合圖役六人
目見以下大筒打
并小役人

右從者夫卒共
百拾壹人
家老以下騎馬、以上、
百三拾人
目見以上之諸役人
拾七人
目見以下徒士小役人迄
四拾壹人
足輕小頭幷足輕浮人共
三百貳拾六人
水主作夏方中間小者
相夫玉藥持共
四百五拾壹人
家老以下從者夫卒共
四拾壹人

六百四拾壹人
右人數合
千六百六人

惣合千九百三拾九人
此度拜借
一五百目玉御筒
同
安政元年二月五日

松平裕之進惣人數
百　三　人
松平淡路守同
百　五　人
但し、先達る御屆仕候人數ゟ追々相增申候、
松平兵部同
百貳拾五人
但し、右同斷、

一三百目玉御筒　拾挺
一六貫目玉筒　貳挺
一五貫目玉長筒　四挺
一同　短筒　壹挺
一三貫目玉短筒　五挺
一壹貫目玉長筒　五挺
一三貫目玉木筒　貳挺
一五貫目玉筒　壹挺
一三百目玉筒　三挺
一百目玉筒　四挺
一五拾目ゟ拾匁迄筒　四拾挺
一足輕筒　貳百八拾挺
一弓　六拾五張
一長柄　貳拾五筋

外ニ

旗頭共自分武器
合拾匁筒　貳拾五挺
長柄　貳拾筋

右ゟ去月廿四日、本牧表出張人數之儀不取敢御屆申上置候處、追々國許ゟ着揃、此節右之通相詰、幷ニ大筒之儀も員數相增備罷在候段、於神奈川驛鵜殿(長興、米使應援掛目付)民部少輔様江同驛出張家來之者ゟ御屆仕候旨申越候ニ付、此段申上候、以上、

御名内
賀美隼人

三月

大砲鑄造ノ蹈鞴取建願

是ヨリ先、萩藩、砂村(武藏國葛飾郡)抱屋敷ニ鑄砲場ヲ新設ス。是日、鑄造ヲ開始ス。

〔萩藩綴込記錄〕(○毛利家編輯所所藏本)

及　御聞、
大膳大夫(毛利慶親、萩藩主)砂村於抱屋敷、大砲鑄造之蹈鞴取建度奉存候、右ニ付、平日ニ候得ゟ其御筋之御役々江前後御見分相願、御作法通取計可仕筈之處、次第を相立候ゟ、急速之間ニ合不申候間、此度ニ限り、其御役向御聞置而已ニる、速ニ取建相成候樣奉存候、此段御内慮奉伺候、

安政元年二月五日

以上、

十二月

丑十二月廿五日、小倉源五右衛門ニ渡之、

○中略、

及　御聞、

川口宿惣左衛門ニ鑄砲ヲ命ズ

此度砂村抱屋敷内ニる大筒鑄立候付、其御支配内川口宿惣左衛門ニ申付候間、此段御屆申達候、以上、

御名内（毛利慶親）

正　月

寅正月十六日、公儀所ニ爲持候、御代官勝田次郎方ニ差出候樣申授候事、同十九日、次郎殿ゟ武弘太兵衛持參差出候由、

○中略、

小川市右衛門ヲシテ佐久間修理ニ鑄砲ノ法ヲ問ハシム

右大炮鑄造之儀爲申合、眞田信濃守樣御家來佐久間修理ニ御用之間、合々ニ被差越候事、

小川市右衛門

寅正月廿一日、各ゟ市右衛門ニ達之、

○中略、

拾貳封度野戰炮三挺

但、車臺共、

齋藤彌九郎ニ鑄砲製車ヲ命ズ

右之通急速鑄造被仰付候付、齋藤彌九郎ニ一途任を切ニして被成御憑候間、此段ゞり克取計之事、

寅正月廿二日、各ゟ來原良藏・桂小五郎ニ相授之、彌九郎方ニ差越、

蹈鞴取建ノ許可ヲ受ク

〔萩藩士〕高杉丹治編輯日記〕○毛利家編輯所所藏本

正月十三日、雨天、

一屋敷改番諏訪庄右衛門殿ゟ依呼出、武弘太兵衛罷出候處、砂村御抱屋敷内大筒鑄造蹈鞴取建之儀、伺之通取建候樣、尤鑄造相濟、蹈鞴取毀候ハゞ、屆可致旨旁庄左衛門殿被申聞、名主共白洲ニ御呼出、右之趣被申聞候ニ付、請書調印仕、罷歸候由候事、

〔萩藩家老〕浦元襄日記〕○維新史料編纂會所藏本

二ノ五日、天氣、○中略、

大砲鑄立開始

一今日ゟ、於葛飾大砲鑄立相成候間、次郎(中井)右衛門・宇(中川)右衛門・政之助(周布)参候、御奥ゟも佐伯丹下・中山隼之助・玉澤五郎兵衛参候事、

〔萩藩士秋良貞溫手記〕（渡邊得次郎所藏本　吾妻遊詩所載）

安政元甲寅早春、於江戸大砲御製造之節、和泉屋善兵衛後見中居撰之介積書仕出之控、尤當時尋常ゟ銅錫引上ゲ、高價之、

鑄砲積書

一拾貫目玉　一千貫目　壹　挺
千貫目筒壹挺　但、壹貫目ニ付、
但、壹貫目ニ付、　代　銀
代　銀　内　譯
内　譯　銅八百九拾目
銅八百九拾目　代三拾匁貳分六リ
代銀三拾匁貳分六リ　錫百貳匁
錫百拾匁　代四拾九匁五分
代銀七拾四匁八分　炭手間代
炭手間代　貳拾目
〆銀百五匁六分

炭手間代
代銀廿目
拾壹匁貳分九リ六毛
吹減り
〆百三拾六匁三分
壹リ九毛
一極上鳴物五百目
代貳拾八匁
一丁銅　幷　錫(サツマ)
壹割(ママ)さし
五百目
代五拾八匁六分
〆八十六匁六分
外ニ吹減り之分
拾八匁九分九リ
〆百拾九匁五分九リ
〆九拾九匁七分六リ
拾壹匁九分六リ四毛
吹減り
〆百拾壹匁七分貳リ四毛
下之分
〆八拾目九分四毛
一拾貫目玉
千貫目拾挺
凡貳千兩
一拾七貫目玉
千貳百七拾貫目拾挺
凡貳千六百兩
内
貳拾八貫目　鳴物金代
拾五貫百三拾目位銅代
四拾三貫四百七拾目位錫

以　上

湯島馬場

大筒御鑄立手扣

差上申候御請證文之事

一八十ポンド(pond)ボンムカノン(bomkanon)壹挺

此金三百七拾三兩永百四十文

但、長壹丈三尺三寸七分壹厘、

凡千三百八拾貳貫目

但、出來之上貫目壹貫目ニ付、

平均金壹分永貳十文ッ、

内 金百六拾五兩三分永五十文 仕上入用
　 金貳百七兩壹分永五十兩 鑄放入用

一二十四ポンドカノン壹挺　但、長壹丈壹尺五寸

凡七百七拾五貫目

拾八貫九百九拾目ゟ代

齋藤

此金貳百九兩壹分　但、右同斷、

内 金九拾壹兩 仕上入用
　 金百十六兩壹分 鑄放入用

鑄込之節敷砂不仕、萬一鑄損出來候ハヽ、入用五分ハ被下、五分ハ私共辨金可仕筈、且鑄形眞銕等を始メ、聊たりとも心障ニ候義有之候ハヽ、手重麥場處ニゟも早速拵直し鑄込可仕、

兵書

ブロイン(de Bruyn, A. W.: Militair Zakboekje) サックブーク

タクチーキョリマサリ(Taktiek) 候事

丑九月十二日、吹合渡高、

丁銅四百八拾貫目

和錫五拾貳貫八百目

〆五百三拾貳貫八百目

内貳拾九貫六百五拾目吹合減

正味五百壹貫百五拾目

同十三日、

一 丁銅 和錫 五百三拾貳貫八百目
内貳拾貳貫九百五拾目 吹合減
正味五百九貫八百五拾匁

同十四日、

一丁銅五百八拾貫九百九匁
一和錫六拾三貫九百目
〃 六百四拾四貫八百九匁
内貳拾六貫九百拾九匁
正味六百拾七貫八百九拾目

一硝石百貳拾匁
一 二字不明 百五拾匁
一水銀(ロウハ)壹匁六分五リ
一ステレキ(Steric) 拾五匁
一アルコール五匁入
一ステレキ壹匁
水銀壹分壹厘ッヽ

右之割合

十五日、

一 丁銅 紅毛錫 五百二十八貫目
内九貫貳百五拾目吹合減
正味五百拾八貫七百五拾目

同十六日、

一 丁銅 紅錫 貳百七拾五貫目
内四貫七百五拾目吹減
正味貳百七拾貫貳百五十目

同十七日、

丁銅 紅錫 五百五拾貫目
内拾貫四百目吹減
正味五百三拾九貫六百目

二十四ホント
一壹貫目

安政元年二月五日

代拾九匁五分
五分吹合手間

二十四ホント

一五貫目餘大筒壹挺

此貫目

但、惣長壹丈壹尺四寸八分壹厘七毛
口徑四寸九分六厘

玉徑四寸八分貳厘八毛

八十ホント

一拾七貫目餘大筒壹挺

此貫目

但、惣長
フク徑七寸三分五厘

玉徑七寸貳分三厘七毛

六ホント

一壹貫貳百目餘大筒

此貫目九拾貫四百四拾五匁貳分

但、惣長五尺三寸七分七リ七毛四四
フク徑三寸一分四厘六毛七二五

口徑三寸四分九リ壹毛七

十二ホント

一貳貫五百目餘大筒

此貫目百五拾九貫貳百七拾九匁六分

但、口徑
フク徑
玉徑

(Lang honwitsoo)
ランゲホーウイツスル

一五貫目餘大筒

此貫目百四拾貫七百目

但、惣長五尺九寸壹分四リ五毛二五
口徑五寸貳分七リ貳毛
フク徑四寸九分九リ八毛五厘
玉徑

古製

一貳貫五百目餘大筒

但、長六尺六寸五分七厘
凡貳百七拾貳貫七百目餘

此金六拾九兩永百七文七分

安政元年二月五日

安政元年二月五日

内金貳拾九兩三分永八十五文八分　仕上入用
金三拾九兩壹分永貳拾壹匁九分　鑄放入用

古製

一壹貫貳百目餘大筒

但、長五尺七寸三厘(マヽ)　凡百四拾九貫貳目餘

此金三拾七兩三分永七拾八文

内金拾六兩壹分永八拾壹文八分　仕上入用
金貳拾壹兩壹分
永貳百四十六文三分　鑄放入用

此金四拾壹兩貳分永拾三文五分

内金拾七兩三分永百七十貳文六分　仕上入用
金貳拾三兩貳分永九拾文九分　鑄放入用

但、壹貫目ニ付鑄込其外一式
永貳百六拾壹文七分

内　永百拾七文七分　仕上入用
永百四拾四文　鑄放入用

嘉永六丑年

八十ホント　貳拾挺
一拾七貫目餘大筒　拾八挺
二十四ホント　拾貳挺
一五貫目餘大筒　六挺
十二ホント
一貳貫五百目餘大筒
六ホント
一壹貫貳百目餘大筒　九挺
二十四ホント
一五貫目餘大筒
十二ホント
一貳貫五百目餘大筒　拾八挺

右ゝ臺共皆出來ゐたし候分、

安政元年二月五日

安政元年二月五日

八十ホント　九挺

一拾七貫目餘大筒

是ハ下田廻り之積り御伺濟之分

十二ホント　拾六挺

一貳貫五百目餘大筒

六ホント　四挺

一壹貫貳百目餘大筒

右ゝ當暮出來可致見込之分

十二ホント　七挺

一貳貫五百目餘

六ホント　七挺

一壹貫貳百目餘

蘭名ランケホーイツスル　拾八挺

一五貫目餘大筒

短身カノン

一五貫目餘大筒　三挺

タライハツ (Graibank)

一百三拾目餘　拾貳挺

右ゝ來春可致候分、

蘭名ランケホーイツスル　貳挺

一五貫目餘大筒

十二ホント　拾三挺

一貳貫五百目餘大筒

右ゝ打樣之上御貯ニ可相成候分、

蘭名ボートホーイツスル (boot howitser)

一貳貫五百目餘　五挺

右ゝ此節目論見申、追ゝ出來之上、箱館表ニ可相廻分、

短身カノン

一五貫目餘大筒　壹挺

タライハス

安政元年二月五日

一百三拾目餘　六挺

右ゟ鑄疵有之候ニ付、御貯之積り御伺可相成分、

合百七拾九挺

内

五拾六挺　壹貳三五六御臺場御据用之分

六拾貳挺　同斷此後御据用可相成分

六拾壹挺　船打幷御貯之分

外

大坂廻り

一八貫貳百目餘大筒　壹挺

同斷

一壹貫百目餘　壹挺

右ゟ臺出來之上、御臺場ゟ御据付可相成分、

竹橋廻り

一銃筒（四貫目ゟ壹貫目迄）　八挺

右ゟ燒立錐入假臺場出來候貯之分、

右之通ニ御座候、以上、

寅十二月

壹番御臺場

八十ポント　拾挺

二十四ポント　拾挺

十二ポント　壹挺

十五トイムランケ（duim lang）　拾貳挺

貳番御臺場

八十ポント　拾挺

二十四ポント　壹挺

十二ポント　拾貳挺

十五トイムランケ　四挺

三番御臺場

二十四ポント　拾壹挺

安政元年二月五日

十二ホント　拾貳挺
十五トイムランケ　四挺
四番御臺場
十二ホント　五挺
六ホント　五挺
十五トイムランケ　貳挺
五番御臺場
二十四ホント　四挺
十二ホント　六挺
六ホント　六挺
十五トイムランケ　貳挺
六番御臺場
二十四ホント　四挺
十二ホント　六挺
六ホント　六挺

十五トイムランケ　貳挺
八十ホント　貳挺
二十四ホント　貳拾挺
十二ホント　貳拾貳挺
合
六ホント　四拾八挺
外同斷五挺
十五トイムランケ　拾貳挺
外同斷五挺
外同斷貳挺　拾六挺
外
八十ホント　貳挺
二十四ホント　六挺
十二ホント　拾三挺
十五トイムランケ　貳挺
安政元寅年極月
西洋小筒製造御用奉願候積り書付
一蘭名ヘレキッシーヱケウヱール (pierousie rawieu)　壹挺
安政元年二月五日

代金六兩

但、玉目八匁薄張長三尺三寸、地鋏鍛卷張上磨ニ仕立、ハント金三ツ、用心金竹之節芝引裏座金眞鍮ニ仕、其外地板打鋏内カラクリ幷ハン留ハシキ、カン、カルコ、モク鎗一式鍛鋏ニ仕、臺木極上椋茂久木目通り無節こる仕立、力様極上制藥目込貳ツ玉貳匁様シミ上揚錐仕上之上、星的打試巣中御見本之通り上仕立致、入念相改極印上納可仕候、

右之通、惣鋏かなものニはたし、　壹挺

代金七兩也

剛鋏製　壹本

一劍

但シ、御見本之通り出來可仕候、

代金壹兩

一鑄形　壹膳

代金壹歩

アナツカ製

一剃刀

代金貳歩

一玉取紙取

代拾匁

一三股

代五匁

附屬之分

合金貳兩

右之者、私義主命代受、小筒製造方ニ付、不惡仕、主家要用丈之處ニ、追々右小筒數多御製造不仰出候趣候得共、兎角捗取兼風聞承知仕候、仍る之此節柄之義、何ゟ御奉公筋ゟ心得、前ヨリ直段積りを以、三十挺製造被仰付上ハ、去一ヶ年三百挺、拾ヶ年上納濟銀之御定ニる、主人方ゟ引請被仰付ゟ、骨折出精張立上納仕度奉存候間、此段内々其筋ゟ御内慮御伺被下度、御手筋を以御聞合被下候様奉願候、以上、

正月　土居能登守家來

内山隆介

土井能登守様ゟ、私家業劍術稽古被仰付、年來御出入ニ候處、別紙名前内山隆介義ゟ、君命御受、西洋火術詮鑿ニ不惡仕、既ニ爲同志海上炮術全書御藏板ニ以たし、小筒製造之義も年來骨折、於國元張立、近頃功者ニ相成、別紙直段付出來、當時小筒御用相勤候御砲師ゟ、都下住居ニ付、諸掛の多、小筒壹挺ニ付、代金壹兩貳歩餘高直ニ相成、三千挺ニ成ゟ凡金四千四五百兩之高直ニ相成候間、右願之通被仰付度候、御引請相成候得ゟ、小屋場御入用并掛り役ニ御世話計も不容易、廉々御減少ニ相成候得ゟ、御用達多キ折柄、聊たりとも御益筋之義ニ付、別紙相添御内慮奉願候、御勘考被下ゟ模通り兼候義ニ候へ共、直段被下候(様脱カ)奉願候、以上、

水道橋を渡り聖堂ゟ下り
取付之横町

鑄物師湯しま

太田万吉承合

手間　來太郎

湯島櫻ヶ馬場御製造場役者

江川内

締り役　齋藤左馬之介

差引　友平榮

手傳　柳原泰次郎

江川手代　柏木宗藏

中村清八

大炮鑄造師　太田万吉

松屋滿太郎

松屋貞之進

川崎安之介

大塚善之介

本多越中守内(忠徳、後肥後守)　星野覺兵衛

川越藩　岩倉銕三郎

江川殿弟

同所こる、

出來調候御筒之事、

一八拾ホント　廿五丁
一廿四ホント　三拾七丁
一拾貳ホント　六十六丁
一ランゲ　廿町
一六ホント　拾七丁
一舟打廿四ホント　三丁
一ボウトホーキツスル　貳拾八丁

右五之御臺場御備場江出ル、此外竹橋内之御藏入ニ相成由、

以上、三百挺位出來調、

辰三月話、

一八拾ホント長サ壹丈四尺　重サ千四百貫目
一廿四ホント長サ壹丈壹尺　重サ七百八拾貫目
一舟打廿四ホント長サ七尺位　同　三百六拾貫目
一拾貳ホント長サ六尺位　同　百七拾貫目
一ランゲホーキツスル長六尺位　同　百六拾貫目
一六ホント長サ五尺八寸　同　九拾五貫目
一ボウドホーキツスル長サ四尺四寸　同　五拾貫目少餘

但、舟打兩用、

以上、

一銅壹貫目ニ付代銀貳拾六匁

但、此内ゟ三拾八匁迄ニ上ケ候事、

一鳴物ゟ代銀三拾目位

但、惣盤鉦鼓之類錫入り之物故、右之通、

一釣鐘代銀貳拾三匁位

一唐金類當時拾六匁位

但、此内地震前迄ゝ廿貳三匁位之處、震後右之通、

一錫ほぬし類上物ニて百五拾目位

四割七歩渾化銅之事、

外壹割と申ハ、壹貫目ニ付錫四百八十目差ゝ、

但、錫と蘭國又と薩摩之間、

右錫四割七歩之内外ゝ、（算當）

鳴物ニて鑄造之事

一鳴物と、新銅三割差、錫と此新銅へ拾歩壹さし、

一上鳴物と、銅計リ三割さし、錫ニ不及、

但、上鳴物ニと、錫入居候故、新錫差ニ不及、

一半鐘惣盤之類、上鳴物三貫——（不明）也、釣鐘ハ次之、

一釣鐘古代を上とも、後世の物と交り多し、

一下鳴物、地金不宜候ゝ、役ニ不立部可有之、見分ヶ肝要之、

一當辰年ゟ七年前、牧遠江守様ニてトータン（zinc）入り本邦之鑄法と、西洋法トータン不入ト、

兩用御例シ相成ル、役人と木俣熊之進と云、鑄造師と太田吉兵衛と申者ニて、百目筒破

裂、トータン不入方堅固ニ有之候由、此太田万吉話ゝ、猶以相試度事ニ候、

六日乙亥　前水戸藩主德川齊昭（前權中納言）登城ス。幕議、米國ニ通信通商ヲ許サザルニ決シ、米使應接掛林韓（大學頭）（儒役）等、再ビ神奈川ニ赴ク。

〔松平忠固日記〕（○子爵藤澤榮一所藏本）

二月六日、

一四ッ御太鼓ニゝ出宅、

一登　城四半ゟ二寸前、

一御機嫌御側衆美濃守（石河貞次）より伺之、（○中略）

一水戸前中納言殿御登　城有之、

一御用有之、別段御逢相願、御取次左右ニゝ一同奥ゟ廻、太公望御杉戸際ゟ寄罷在、尚亦御取次案内ニゝ一同脫劍　御前へ出　御用相窺引、

一御用濟使遣、一同退出、

〔汲深齋晴陰記〕（○本多忠德日記子爵本多忠晃所藏本）

二月六日、乙亥、陰、

晴

林井戸神奈川ニ歸ル

林等ニ應接委任狀ヲ渡ス

林大學頭、井戸對馬守、又發於神奈川、

〔村垣範正公務日記〕○村垣範通所藏本

二月六日、例刻、○中略、

一林大學・井戸對馬被仰含之儀有之、都る應接之儀御委任被遊候旨御書取、掛り一同へ御渡し、

一右兩人今八時過、御城ゟ直ニ神奈川江出立相濟、

〔水戸藩御城書海防箇條書拔〕○公爵德川圀順所藏本

二月七日、

儒者
林大學頭
町奉行
井戸對馬守

右も異國船渡來ニ付、先達る浦賀表江爲御用罷越居、追る神奈川表江引返シ罷在候處、俄

林等歸任

德川齊昭登城

ニ御用有之被爲　召寄候所、昨六日夕、神奈川江又候發途仕候由御座候、

〔安政甲寅日記〕○帝國圖書館所藏本

二月六日、

一林大學頭・井戸對馬守、今夕　御城退出ゟ直ニ神奈川表江出立之積ニ御坐候、應接日限ハ、右御兩家彼地御越之上相極り可申由ニ御坐候、」水戸御隱居樣今日御登　城有、最早御退出相濟申候、以上、二月六日、俊、

〔聞見錄〕○維新史料編纂會所藏本

林大學頭・井戸對馬守、今日晝時過、出立ニ相成申候、

二月六日　　御坊主衆　書出

〔陣營日記〕○維新史料編纂會所藏本

二月六日、今日江城江被召候御用掛御役人、又々神奈川宿江發足、

〔浦賀日乘〕○東京帝國大學所藏本　如是我閣所藏

二月四日、俄ゟ林家井戸殿江戸江御歸り、直ゟ御登　城、引返ー御出立ゟ可成評判之處、六日曉八ッ時之御出立ニ相成、

〔沿海杞憂〕○維新史料編纂會所藏本

林等出立

二月五日、四時過井戸對馬守・林大學頭、神奈川ゟ登　城、夕七時前於西湖之間、水戸前中納言殿御逢直ニ出立之積之處、延引、今日御退出懸直ニ出立致ー候様被　仰渡有之、應接八日頃ニも可相成哉之趣ニ御坐候、

〔御用部屋坊主〕山里宗悦書翰〕○東京帝國大學所藏本　如是我聞所載

○二月七日辻嘉平次宛

御用部屋詰御坊主山里宗悦より、辻嘉平次へ之書狀略、

扨昨今殿中御模様、例之空説のミまて、別段承込候處無御座候、併一昨日水府様御不快之様承り候處、昨日ゟ五ツ半時之御出仕こる難有奉存候、是迄書前後之御登　城之處、右之如く早々被爲入候ゑ、何ゝ御様子有之儀と奉存候、御評議も有之哉、昨七ツ前林公井戸公　御城より直ニ御出立御座候、應接ハ十日比ニも可有之哉抔申候、明日當番ニ御座候間、探り候る少も相分り可申、取留候義有之候ハヽ、又々可申上候、昨日御咄御座候、水府様御家中へ之御觸書差上申候、乍略右御觸左ニ印ー申上候、以上、

二月七日

〔備後福山〕阿部家記近事鈔〕○伯爵阿部正直所藏本

二月三日、老中連名ニテ林大學頭初四人ニ遣ス書取左ノ通、目付堀織部ヲ以テ達セシム、

林等召還ノ理由

御用之義も有之候間、四人之内申合兩人、明四日、老中登城迄ニ御城ゟ可被罷出候、尤馬上乘切まるも都合宜様可被致候事、

老中林等ニ旨ヲ授ケテ歸任セシム

右ハ此節亞米利加船九艘共、神奈川沖ニ乘入碇泊、因テ大學頭初、神奈川驛ニ旅宿シ、毎度ノ應接彼レ甚タ難題ノミ申出、我ヲメ必ス開港互市セシメントシ、且强テ江戸府内ニ來リ、直ニ老中ニ面談論決セントスル諸件、四人ヨリ報告シ來ル、異人ノ狀情ノミナラス、我カ應接人ノ情狀モ不詳、因テ急ニ如此ニ及シナリ、既ニメ大學頭來ルニ付、前中納言初老中詰論云々、旨意ヲ含メ、縱ヒ一時ノ試タリモ決テ交易ハ許スヘカラス、若シソレニ因テ彼レ暴ニ兵端ヲ開カハ、實ニ止ムヲ得サルノミ、サレモ彼トテモ如此ノ暴戾ニ至ルヘキ筈ハ無カルヘシ、老中面談ノ如キハ彼ノ府城ニ納ル、事ハ決テ許サレス、大師河原平間寺等ニ於テ爲スヘキハ、臨機ノ事ナルヘシト示授シテ、神奈川ヘ還ラシム、

○德川齊昭ノ動靜其他ニ關スル史料ヲ、便宜次ニ收ム。

〔前水戸藩主德川齊昭手記〕○水戸藩史料所藏

閣老通商不許ニ治定ト言フ

二月六日、登城通信通商之儀ハ決る御許容無之筈ニ治定仕候旨、閣老共申聞候ニ付、我等も大安心、尤大學（林等）・對馬（井戸覺弘）へも右之儀精々相達候よー、

七日、今日牧野（忠雅・老中）の外（此間中牧野不快押居候處今日引込）五人へ逢候處、何れも決心いたー候ゆへ歟、一同様子よ

ろ〜く候、通信通商は御許容無之儀伺ニ相成候處、其通申付候樣ゟとの御沙汰、大學始奉畏、今朝神奈川へ發足のよ〜、多分十日方の應接ニ可相成、萬一老中へ逢不申候ゐハ、承知不致候ハゞ、老中罷出、大學一同可申張との内評の由、

〔東湖日錄〕○水戸藩士藤田彪日記　公爵德川圀順所藏本

二月六日、朝出仕、夕出仕、

今日五半御供揃ふて、太公御登城（德川齊昭）、八ッ時過御退散、通信通商之儀ハ決る御許容無之と、閣老決議之段申上、林・井戸へも其旨達ニ相成候由、太公御快然可知、石和へ一書を贈り、昨日の丹誠を稱ス、

太公御快然

（首書）福田八郎衞門來ル、

七日　石和來り一寸立談、林・井戸も此上交易之儀ハ口外仕間敷旨、御請申上候よ〜、津田山三郎・鮫嶋正助來ル、昨夜華木（加藤木）來ル、黑川へ委曲ニ傳言ゟ、

石川和介ノ談

〔水戸藩士茅根泰筆記〕○公爵德川圀順所藏本　鈴木大雜集抄所載

二月六日、御登營あり、林等ニ御逢ハ無之候得共、兩人へ閣老ゟ達有之、彌應接之義被命、尤通信通商之義ハ如何樣申立候共、決る許容ゟましき旨申達さる、此夕兩人金川ニ發ゟ、横濱へハ此節應接場之小屋新ニ出來ゟ、

〔水戸藩士藤田誠之進書翰〕○公爵德川圀順所藏本　東湖遺翰所載

○二月六日福山藩士石川和介宛

昨日之貴囑皆行違ひ（家老共人拂之用有之故ニ御坐候）空ク手を拱、薄暮ニ至候處、幸ニ　營中ゟ御書來候ニ付、先々今日力疾登　營とハ罷出申候、昨夜僕ハ不謁候處、漂撫石炭ニ付相濟候ハハ、此上なき事勿論、乍然此間中滿庭の御模樣迚も其段ニハ無之、通信と内交とさへ御許容無之候ハ、大出木（來）との口氣のよし、尤出交も内交も五十歩百歩と可申候ハ共、是ハ雲泥、權在我候故止るも自由之、一躰の勢、他日どうで鎖國ニる押ぬき候ゐハ、御持張六ヶ敷云々、只此節要せられて彼ゟ願御許容と申處ハ大遺憾故、漂石のみニて相濟候ハハ國家の大幸、何とそ右樣致度云々の口氣のよ〜、ゆそぎ草々頓首、

六　日　　彪

藤陰先生
ゆそぎ

鎖國一天張ハ不可能

德川齊昭ノ意圖

〔水戸藩士原田成德日記〕○公爵德川圀順所藏本

二月五日、晴、（中略）、尙又明六日も御延引可被遊旨被仰出候處、今夜五ッ時比、阿部伊勢守殿直書狀以、明日ハ是非御登城被遊候樣申上候ニ付、御供觸有之候、六日御登城ニ相成候處、

德川齊昭登城

齊昭ノ出缺ニ依リ幕議變動ス

正太郎書翰

廟堂ノ洩機

伊澤政義松平近直ノ評

右御引込ニ付るハ幕議甚六ヶ敷相成、右交易論くらりと引かゑり、交易一(作カ)許御斷ニ相成、漂流人撫(恤カ)邨幷石炭被下置場之儀ハ、五度も七度も應接之上、彼レ無據筋合こる不得止事ニ候ハヽ、其節先可及評議との事こる延くり置、追る指急し候共、如何共御評議之上、御挨拶ニ可相成との評決ニ相成候趣、　老公只一日御引込ニ相成候へハ、右之通、ぐらりさらり評議も打てかゑり候次第、扨も〳〵可歎事之、　老公不被爲入候ハヽ、大日本大恥辱、御先祖へ御對し被遊候るも不相濟事ニ候處、さそこの神州の尊キ　老公の御忠情奉感(服カ)伏候、老公幷阿部計の由、其外溜詰を始、交易論ニ相成候、歎敷事之、

六日、曇、

老公五半時御供揃、早メ御登城被遊候、夕七ツ位歸御ニ成、

〔國事記〕○公儀御隠川圀順所藏本

以書翰啓上仕候、此間ハ追々御懇書被下置、別る難有拜見仕候、一昨廿九日ニ一書可差出ゟ存候へ共、如何こも雜用混亂(御書院番御小姓組御濱警衛ニ被詰候ニ付る之)、故、終不能、其儀ハ浦賀邊より生麥邊迄異船進退之始末ハ、唐謹等目擊直聞故、不相記候、但廟堂之洩機承候處一寸申上候、伊作(伊澤政義)州(義)ふるもの正論と存知候處、大ニ相違、矢張松(松平近直)河州之徒ふる由、彼地へ出候も河州之盡力こる出候由、依る河ニ同論ふるよ〳〵、河ハ頗狡黠こる、去夏より當今迄表ハ正論こる、内實

戸田氏榮香山榮左衛門ノコト

小田又藏登庸ノコト

ハ姦腹、乍去無助才爲て居り、只今ニ自分と(ヶヽ)交易論を不唱ニ、人を遣ふて爲唱候事、兎角彼ものゞ當今之大毒虫こる御坐候由、羽倉外記も爰等之處ハ餘程存知居り候由、伊佐(新次郎カ)ゞ作州を譽め候得ゟ、どふぞ河州と餘程深き色事をやりて、彼地ニ出候樣ふりと被申候由、作州之河州腹(同脫カ)ふる事ハ、玄河(黑川嘉兵衛カ)も存知居り候由、豆州(戸田氏榮)ハ本より取るニ不足、去年夏彼理へ嘉(善)山榮左衛門ゞ豆州之命を以、大體壹人こる應接取扱候由、夫れニハ色々不屆之致方御坐候由、一體去年内海へ乘込候と申ハ、榮左衛門ゞ彼理へ内々こる江戸近くニ乘込候方ゞ早く事ゞ埒明候故宜敷と申候由、夫故乘込候との事、彼是玄河も去年榮ゞケ樣申候抔ゟ謂て甚困り候事、毎々ふるよ〳〵、次ニ拙へ之書狀(次ニ收ム)ニも御坐候、依る當年ハ榮左衛門ハ一切異人へハ貌出〳〵不被仕由、去年ハ取扱別段之趣こる、御抱席より御普代永々御目見席ニ相成候をの、當時ハ異人ニ貌出〳〵不出來こるも御察可被下候、榮ゞ見通〳〵こるハ、交易ニふりて己れハ異人よりよく被思て、己を利そるの計をるへ〳〵、豆州ハ彼を天地間之一人と存知居り候由、爰等之ぐ合ハ玄河もよく存知居り候事、浦賀ハ玄壹人外ニ人才無之、甚危き事ニ御坐候、玄も櫻任(櫻任藏)ニ向へて(ヶヽ)是非、援兵無之るハ立切れ兼候と申候、援兵と申ハ小田亦藏(又)ふらでハ役ニ立申間敷と申ニ付、櫻歸府之上、中西と心を合て石和(石川和介)へ精々遊說、石も大ニ慨嘆いさ〳〵、直ニ福(阿部正弘)へ言上之由、夫よりハ跡承り不申候、兩田(戸田藤田)へも兩人こる行て遊說いさ〳〵候事、小田

徳川齊昭ノコト

小笠原島貸與ノコト

戰ニハ成ラザルノ論

亦實ニ慨嘆患國之情專らニ、只今こるハ天下の有志ハ、
老公を彼是と申上候事、爰ニ至る御決斷無之るハ不相成樣との事、他より見てハ尤之事ニ
御坐候、乍去まさ被遊ニ不被成譯ハ有之間敷、第一御内も一致セバ、彼是ハ他人之不知處
ニ、石ゞ說ニ近頃ハ大樹公老公へ度々御逢有之る、何分賴むとの御意御坐候、頻ニ依賴一
て御出之由、話一候旨如何ニ候哉、一向不相辨、左樣ふれバまゞ賴とも有之事ニ御坐候、
近々奥向邊抔より承り見可申、四五日前之、當時まゞ議論決着無之趣、小笠原を貸一可申哉、乍
去小笠原島ハ日本人壹人も居りも不爲處をか一可申とて、夫こるハ承知も致間敷、夫より
ハ八丈島歟か一候ゞ可宜哉、老公ハ金帛等こるも遣りてふや一て先ッ返ぼより外ハふ一
と被仰候由、此頃此三葉(條)ニ議論決着不致と之事、廟堂之勢老公ゞ御出有之故ニ、未タ互市
之議論ニ不相成趣、夫ニ勢州ハ半表半裏ニる被持て居り候との事、夫故老公ハ他人之見る
處とハ違ひて中々御手を御引き被成兼候由、如何まも左も可有形勢と奉存候、老公之御手
を被爲引を不歡もの滿朝何程も有之間敷候、櫻之申事ニ迚も戰ニハ不相成ぼと被思候、如
何とかれバ此方ゞ殊之外弱き故ふり、何と亂妨いさ一ても決る從此方兵端ハ不開との事
かれバあり、乍去海岸へ上陸一て遂ニ姦淫抔をもるニ相違ふ一、然らバ民間の者も人情不
被忍打殺ぼ位之事ニ相成可申、夫より兵端を開き候ハヽ、まさ藩中ニハまさニ憤悶ニ不堪

兵端下民ヨリ開ケン

天下賴ムハ二三諸侯ノミ

黑川嘉兵衛書翰

一て居るもの有之候得ば、進て戰ふ者一、然らバ接戰ニふる者一、十ゞ七八ハ先ッ戰ニふ
る間敷、跡之二三ふるハ上よりハ不成、何レ下民ゞ本(事カ)を發一て接戰ニふるへ一、どう樣願
くハ、其二三の處ゐらまほ一との事、宜哉、御茶之水ニて江川掛りこる松河州抔隔日ニ被
見廻て鑄立候大筒、御出來之筒ハ僅四五挺ふるよ一、何れも身ニ不染ニ拵候故、埒明不申
事との說、天下の形勢何一ッ賴む處無御坐候、只賴むハ諸侯之内ニハ正ニ戰ふ之決斷之者
も可有之との事、委敷申上度候得共、此兩三日と申ハ如何まも閑ケ敷内ニ居ると、客來ニ
る手紙歟認る暇無之候、令弟歸り迄ニハまさ認置委敷可申上、令弟持參等之御返事ハ其節
可申上候、唐謹等ゐまり優長、嘸々御待被遊候哉御察申上候、乍去誠以感心之事ニ御坐候、
滿朝老公之御意地をやき、御引き被成候を待て居る位之事ニ可有之候、河州抔の腹こるハ
數十艘異船來れハよいと思ふ位之事ニ御坐候由、魯西亞も平穩ニ出帆とハ申候得共、中々
左樣こるハ無之由、何れ四月頃ハ浦賀へ來り可申と之事、唐謹立掛故、草略如此ニ御坐候、

二月二日朝認　上ニ　總左衛門(大森總左衛門カ)様　貴下　正太郎(加藤本正太郎カ)とあり

舊冬より大御無沙汰御免可被下候、春寒强候處御勇剛奉恭賀候、偖御承知之通火急之義ニ
る兩度當表出張、今度ゞ異國之事こる無之出張之所、不計異船沙汰ニ相成、とふ〳〵七艘

應接ノ模樣

「アダムス」ハ手强ハシ

再渡仕候、右ハ彼のヘルリも參り、外ニブカナン・アハダムス・コンチイと申三人之將官も有之、殊之外大仕掛ものゝて御坐候、拙儀今般ゝ大任ゝて始終應接ヲ引受候間、則十七日より逢對いさ〜候處、百聞一見ニ不如ゝて存外事安く、理ヲ以毒(貴カ)候へゝ、更ニいくゞのなきものゝて御坐候、乍去彼ゝハ力と申畏敷もの充分ゝ付、理毒(貴カ)ゝ逢ふと力ヲ飾り無法を申出〜、とんと役場仲間之さ〜買同樣ニ御坐候、夫故昨年之夏、輕薄者共打寄、浮薄之取計いさ〜置候ニ付、種々後患之義有之、愈昨夏ゝくいさ〜置てやと、事々物々思ふ事而已こる、誠ニ大息之至ニ御坐候、併彼より容易ゝ兵反(マヽ)ハ不開模樣顯然ニ候間、此場合ハとも角も、是ニこりて江戸海門之備ハ森嚴ニいさ〜度、夫而已懇願ニ御坐候、アハタムスと申奴ハ至る英雄ら〜きやつゝて、如何ゝも手こいく候へ共、此方ゝいさといゞこふと申手こさへさへ有之候得ゝ、取む〜くハ安かるへく相見候間、別る心外至極、現物ニ臨候るゝ憤悶やるかさゝく御坐候、御笑察可被下候、種々御話も申上度子細も有之候間、何れ後音萬楮可申上、殊之外取込罷在候間、あら〜〜當時之模樣而已申上候、匆々頓首、

正月廿一日　上ニ　正太郎樣　　嘉兵衛(黑川嘉兵衛)　とあり

奉呈候、春寒却甚〜く奉存候云々、扨異賊羽根田沖へ入船ニ付、當月朔日、御勘定奉行松平

幕府ノ對策

六日下城後老公上機嫌

河内守大好物・江川太郎左衛門海港へ被遣、同二日、彼地より御徒目付・御小人目付等も當地へ來著、同三日、井戸對州・林學士兩人浦賀より來著、四日ゝハ、老公いつもより御早め、四ツ時比より　御登城、夜五ツ半時位歸御、御風氣ニ被爲入之旨ゝて、五日ゝハ御延引、六日も御延引之旨被仰出候處、俄ニ御登城之義又々被仰出、昨六日五半時御供揃ゝて御登營、八ツ頃歸御、何事ニやありけん、是迄之間ハ諸老先(マヽ)も青くゝあり白くゝあり、至極御苦心、實ニ如何と痛心のみ罷在候處、右歸御後ハゝこ〜〜被成候御樣子御坐候、林學士等之姦說滿朝候ゝへ、四日ゝハ御激論之上、五日ハ御引被遊候御事歟、如何之ゝけゝて六日ニハ御登營被遊候や、定る區々碌々之義ゝて、御出顯ゝハ相成間敷と奉恐察候、五日大城之大紛亂、何共不可謂と云、林學士等ハ、又々五日ニハ彼地へ發足之筈之處、一日野服ゝて城中ニ立ぞみ居候由、御登無之ゝへと相(マヽ)像仕候、六日御登後發候由御坐候、夫ゝて大略可察事ニ奉存候、右之事情ニて、尙以此上之儀、於御家ニハ各彌益憤發、以死報國之覺悟無之るハ不相濟候處、邸中之模樣、嘆息痛哭仕候事のミニ御坐候、此段申上度、

二月七日　錦(金子孫二郎カ)君　執事

台　般

尙々、右之儀、必御漏洩無之樣、偏奉願上候、此方ハ何事ゝ〜、全く之御風氣ニる、皆人あ

やーみ不申様相見候、

〔米使應接掛町奉行支配組與力　浦賀御用日記〕○帝國圖書館所藏本　德川幕府書類外國事件書所藏

二月六日、曇晴、○中略、

一今夜五半時頃、御頭（井戸覺弘）御歸着ニ付、御出迎いたし、御留守中相替儀無之旨申上候事、

〔小倉藩横濱日記〕○伯爵小笠原長幹所藏本

二月六日、○中略、

一林様井戸様、今日江戸ゟ神奈川江御歸り被成候、

〔墨夷應接錄〕○公爵德川家達所藏本

二月六日、大學頭・對馬守、曉七ツ時江戸出立、四ツ時金川江到着、○下略、

○參　考

〔開國起原〕安政紀事〕

二月朔日、老中松平賀州陰ニ松平河内守（勘定奉行）ニ命シ、急ニ横濱ニ赴キ、内意ヲ林・井戸等ニ傳ヘテ平和ノ談判ヲナサシム、調ク應接ノ事一々旨ヲ老中ニ請フナカレ、モシ之ヲ老中ニ請フ、老中又之ヲ前納言ニ乞ハザルヲ得ズ、然ラバ必大ニ平和ヲ破ラン、卿等宜シク相議シテ專決事ニ從フベシ、若其後日ノ咎ハ老中之ニ任セント（日記ニ松平伊賀守殿御廻、御勘定奉行松平河内守ヘ入ル、カ人ハ神奈川ニテ應接有之ニ付、右編所ヘ今日立寄リ、ニ應接井戸對馬守、林大學頭ヘ面々ヘ應接ノ雰林見ク、申談候條、締可被致、トアル、是則ナリ、）

是則和議ノ一タと決スル始メナリ、前納言此内諭アルヲ聞、大ニ驚キ且憂ヒ、四日、林大學ヲ城中ニ召遲シテ、交易ノ決シテユルスベカラザルヲ面命ス、六日、老中等林大學ニ諭シテ前納言ノ命ニ從ハザラシム、

米國軍艦「サラトガ」Saratoga、上海清國ヨリ來航シ、神奈川武藏國橘樹郡沖碇泊ノ艦隊ニ合ス。

〔米使應接掛林辯等屆書〕○公爵德川家達所藏本　豆州下田港亞墨利加船所藏

○二月三日老中へ

異船猶又相見候段屆出候付申候書付（上脫カ）

林大學頭（爲煕、儒官）
井戸對馬守（覺弘、町奉行）
伊澤美作守（政義、浦賀奉行）
鵜殿民部少輔（長鋭、目付）
松崎滿太郎（純鋭、儒者）

昨二日七半時、城ヶ嶋ゟ七八里程沖合ニ異船壹艘相見へ、西之方江走居候趣、同所詰番人

異船一艘見白子沖ニ一艘見ユ

共ゟ注進申出候段、相州陣屋詰家來之者ゟ申越候段、井伊掃部頭家來共ゟ私共旅宿江届出候所、同日午之刻過、異國船壹艘、安房國白子村地先ゟ四里程沖合江相見エ、申酉之方を向走候旨、同所遠見番所ゟ申出候段、北條陣屋元ゟ申越候段、松平下總守家來ゟ爰届出申候、依之不取敢此段御届申上候、以上、

林　大學頭
井戸對馬守
伊澤美作守
鵜殿民部少輔
松崎滿太郎

二月三日

〔浦賀奉行戸田氏榮届書〕○内閣記錄課所藏本　通航一覽續輯所載

一艘洲之崎ニ向フ

○二月四日老中へ

城ヶ嶋沖合ニ相見候異國船帆影相見不申候段、昨三日御届申上候處、夕刻ニ到り同所沖合ニ帆影相顯れ、洲之崎を向紛走仕居候段、三崎詰組之もの又々注進申出候ニ付、今曉より見届幷乘留之もの共差出一置申候、此段御届申上候、以上、

二月四日　戸田（氏榮、浦賀奉行）伊豆守

松輪崎沖ヘ入ル

異船ハ「アメリカ」類船ナリ

吏員ノ乘船ヲ拒ム

先刻御届申上候城ヶ嶋沖合ニ相見候異國船一艘、昨夜中安房崎（相模三浦郡）・松輪崎（同上）之間ニ碇泊いたし候趣、三崎詰組之ものより今四日辰刻注進仕候處、追々帆卷立松輪崎沖江艘入候段、井伊掃部頭家來よりも届出、見届幷乘留之もの未立戻不申候間、渡來船之國名等相分兼候得共、此段御届申上候、以上、

二月四日　戸田伊豆守

追々御届申上候異船之儀、組與力見届之もの、今早朝より差出候處、異船一艘、相州松輪崎沖江碇泊いたし居、尤アメリカ類船之趣ニる大筒廿二挺据有之、風樣次第早速江戸表江罷越候段手眞似いたし候趣、只今見届之もの引取申聞候ニ付、猶又應接之もの乘組、可相成丈引留置可申と諭中ニ御座候得共、類船御座候義ゟへ行届兼可申と奉存候、先此段申上候、以上、

二月四日　戸田伊豆守

先刻御届申上候松輪崎沖滯船之アメリカ船江應接之もの差遣一候處、乘船不爲致通詞を

以種々申諭候得共、蘭語相通ー不申候故通辯行屆兼、其上逆風波荒こる異船繫場も全内海
江乘入候義も無御座候、朱引堺江碇泊仕候義ゑへ、無據引取候旨組之もの罷歸申聞、樣子
柄見受候處案堵こと御座候得共、兵粮船こも御座候哉、尤風和き候ハヽ帆卷立乘入可申と
奉存候故、猶又明日ハ早朝より組之もの差遣、可相成丈ケ一艘こても當地こ差留置申度奉
存候得共、唯今之樣子よてハ如何可有御坐哉と心配仕候、先此段申上候、以上、

二月四日　　戸田伊豆守

○二月五日老中へ

昨四日御屆申上候松輪崎沖合こ碇泊仕居候アメリカ船、今五日巳剋頃より帆卷立追々乘
込、未下剋頃上總國百首（竹岡村）江向キ紛走仕居候、尤今朝より應接之もの通詞召連出張仕、浦賀
こる繫留候樣申付置候得共、異船江乘組候義如何御座候哉、類船繫場まてハ押る乘込可申
と奉存候、先此段御屆申上候、以上、

二月五日　　戸田伊豆守

先刻御屆申上候アメリカ船江組與力近藤良次・佐々倉桐太郎通詞召連乘組候處、右ハ昨

竹岡沖ニ向フ

年渡來いたし候船よて船名サラトカ船將之名ウアカと申候由、當正月三日サンハイ出帆
風樣不宜手間取、類船相慕罷越候趣こて、船中至る穩こ有之、先達る渡來之船々ハホンコ
ンより出帆仕候故、一同こハ不相越候由、右こ付、本船之方江到着之儀爲知吳候樣申聞、書
付差出候故、受取之、右船之義ハ浦賀表江繫留候樣申諭候所、一應承知仕、鳥ケ崎沖こ碇差
入候得共、本船と相隔候ハヽ不都合故、何れ明日ハ神奈川之方江相越可申哉こ見受候段、
組之者罷歸申聞候故、御固方江も申達ー、番船附置、此段御屆申上候、尤此度アメリカ類船
之義ハ、此外こ無御座候段も申聞候由こ御座候、依之此段申上候、以上、

二月五日　　戸田伊豆守

（異國船紀聞）

船名ハ「サラトガ」

鳥ケ崎沖ニ碇泊ス

小柴方面ニ向フ

○二月六日老中へ

昨五日御屆申上候鳥ケ崎碇泊之アメリカ船一艘、強る差留候得共、類船御座候義故、承知
不仕、今六日六半時比より帆卷立、小柴之方江向紛走仕候、依之番船附置、此段御屆申上候、
以上、

二月六日　　戸田伊豆守

〔汲深齋晴陰記〕○本多忠鑑日記子爵本多忠晃所藏本

二月三日、壬申、陰晩小雨、

陰

一艘白子沖ニ見ユ

房州夷獄使、松平下總守報、異船一隻、見于白子邨沖、夜酉時江戸尹報、海船師言、異船三隻見相州三碕沖、

晴風

○中略、

五日、甲戌、晴、

浦賀尹報、昨日異船一隻、碇泊于松輪碕、蓋曩所來之糧船云、

○中略、

七日、丙子陰晩、小雨、

陰

昨夜浦賀尹戸田伊豆守報、昨五日浦賀砲卒近藤良次・佐々倉相(制)太郎及譯官、到於松輪沖之異船、船司云、昨年所來之亞墨利加船、而船號サラトカ、船將號ウァカ、當正月三日、發サンハイ、地名、阻風故及于遲々、曩所來之船、則所發自ホンコン者云、浦賀尹戸田伊豆守報、

神奈川沖ニ入ル

横濱入港

〔米使應接掛町奉行支配組與力〕浦賀御用日記〕○帝國圖書館所藏本德川幕府書類外國事件書所載

二月六日、曇晴、○中略、

一異船壹艘(艘)當湊ニ入津、都合八艘碇泊ニ成候事、

〔異國船紀聞〕○維新史料編纂會所藏本

二月八日、安井金作ゟ申來、

魚船問屋
遠州屋
久兵衛船
常太郎

右之者神奈川沖ニ見張り罷在候處、同所輪之内異船七艘無別條、同所沖異船壹艘、昨七日輪之内ニ乘込候ニ付、輪之内都合八艘ニ相成候を見留、注進申來候、此段申上置候、以上、

二月八日

〔町奉行池田頼方上申書〕○公爵德川圀順所藏本豆州下田港亞墨利加船所載

○二月三日老中へ

異國船壹艘房州崎ゟ勝山沖江乘込候旨申聞候書付

二月三日　　池田播磨守（稲葉、町奉行）

魚船問屋
西宮屋九郎右衛門船
茂助

異船一艘勝山沖ニ入ル

右之者上乘致ー候仕立船、房州大房崎沖ニ見張罷在候所、異國船壹艘同州崎ゟ勝山沖江乘込候を見留候旨、只今注進申來候、此段申上候、以上、

二月三日　　池田播磨守

〔代官齋藤嘉兵衛屆書〕○東京帝國大學所藏本如是我聞所載

○二月三日若年寄へ

相州城ケ崎沖合へ異國船相見へ候由御屆書、

城ケ島沖ヲ過ゲ

昨二日申ノ中剋比、相州城ケ崎より巳ノ方ニ當り、四五里程隔沖合へ、異船一艘地方へ向走り候樣相見へ申候趣、同所簗屋詰手代之者ゟ只今注進申越候、此段御屆申上候、以上、

二月三日　　御代官（武蔵下總代官）齋藤嘉兵衛

房州沖ニ二艘見ユ

三崎沖ニ二三艘見ユ

〔江戸町名主上申書〕○東京帝國大學所藏本高麗環雜記所載

○二月三日町奉行へ

右船生魚運送、昨二日夕八時、房州沖江異船貳艘程帆形幽ニ相見候由、今三日、魚船問屋共申聞候、

房州笠名村
魚船　要助船
廻船問屋
房州や　喜右衛門

相州三崎沖江異船二三艘程帆形相見得候旨、右喜右衛門方江爲知來候、

右之通御座候間、先剋仕立船差出候ニ付、此舟歸帆次第、御注進可申上候、

二月三日　　取締役名主

房州大房崎沖江見張罷在候處、異國船壹艘、同州洲之崎ゟ勝山沖江乘込候ニ付、御注進申上候旨、魚船問屋申聞候間、此段申上候、以上、

二月三日夜　　取締役名主

〔江戸町名主上申書〕○帝國圖書館所藏本 德川幕府書類外國事件書所載

○二月四日町奉行へ

（表紙）「上」

今曉異船三艘（相模國三浦郡）城ヶ島沖ゟ渡來致、神奈川滯船之七艘与合る拾艘ニ相成候趣、海道筋承り候旨、高輪町名主權左衞門ゟ注進御座候、

右奉申上候、以上、

二月四日　暮六時

名主　共

（表紙）「上」

魚船問屋
西宮九郎右衞門船
上乘　仙吉

右仕立船ニる、昨三日夕七半時出帆、今朝六時、浦賀表ゟ着、夫ゟ松輪崎沖迄罷越候處、異船壹艘同所ニ碇ヲおろし、滯船罷在候ヲ見留、引返し、浦賀沖ニる承り候處、跡船之義ハ、聢ゟ相分り不申候得共、類船三艘之由風聞ニ御座候、依之晝九時、同所出帆仕候へ共、北風ニる乘戻し兼、神奈川ゟ着船、同所輪之内異船六艘沖壹艘都合七艘とも、事替候義無御座、

神奈川沖へ入ル

同所ゟ上陸、御注進申上候、

右奉申上候、以上、

二月四日　夜九半時

名主　共

魚船問屋
千足屋甚兵衞船
上乘　惣太郎

右一昨三日暮六時仕立船ニる出帆、沖合見張罷在候處、相州松輪崎沖一昨日乘留候異船壹艘、事替候儀無之、同所出帆御注進申上候、

右奉申上候、以上、

二月五日　暮六時

名主　共

〔彥根藩主井伊直弼屆書〕○維新史料編纂會所藏本 陣營日記所載

○二月四日大目付へ

一昨二日申ノ刻頃、城ヶ嶋ゟ七八里計沖合ニ異國船壹艘相見、西之方ゟ向艇居候趣、同所遠見番所ゟ注進申越候ニ付、出張之者ゟ嚴重心得方申付置候、此段御用番ゟ御屆申上候、

以上、

二月四日

〔彦根藩主井伊直弼屆書〕○東京帝國大學所藏本 如是我聞所載

○二月四日老中へ

今卯中刻相州松輪村沖へ異國船一艘相見へ、追々乘入り候樣之趣、遠見番所之者申出候ニ付、早速乘留船差出、夫々御備向嚴重手配罷在候段、相州陣屋詰家來之者より申越候、此段御屆申上候、以上、

二月四日　　井伊掃部頭

○二月五日老中へ

昨日御達(届カ)申上候相州松輪村沖へ相見へ候異國船、同村壹里程沖合ニ碇下ー罷在候、出船之浦賀與力へ、乘留船之元(有カ)ゟ樣子相尋候處、アメリカ船之樣子ニ相見候得共、何分元船へ寄付不申候故、碇ゟ難相分旨申聞候趣、依之御備筋之義ハ、彌嚴重手當罷在候段、彼地陣屋詰家來之者より申越候、此段御屆申上候、以上、

井伊掃部頭

（如是我聞）

二月五日

〔彦根藩主井伊直弼屆書〕○維新史料編纂會所藏本 聞見錄所載

○二月七日老中へ

相州松輪村沖ニ碇卸罷在候異國船壹艘、一昨五日巳ノ刻頃ゟ間切居、同未中刻頃千駄崎沖迄參、追々乘入候樣子相見候段申越候、此段申上候、以上、

二月七日　　井伊掃部頭

（異國船紀聞）

〔彦根藩主井伊直弼屆書〕○東京帝國大學所藏本 如是我聞所載

○二月七日老中へ

松輪村沖へ繫居候亞米利加船一艘、先船之場ニ乘入可申哉ニ付、爲心得浦賀奉行ゟ達有之段、家來之者ゟ申越候、然處昨朝ニ至り、鳥ゞ崎沖ゟ追々內海ニ向乘入候之趣、相州表家來共より申越候、此段御屆申達候、以上、

二月七日　　井伊掃部頭

〔川越藩日牒〕○前尋市立圖書館所藏本

二月四日、晴、

安政元年二月六日

○中略、

一海岸御掛御月番松平伊賀守殿（忠優・老中）より左之御屆書壹通、御留守居代谷貝純一郎持參之、御取次石川三十郎を以差出候處、被成御落手之旨、以同人被仰聞之、

一昨二日申中剋城ヶ嶋沖合ニ異國船壹艘相見候段、三崎詰ゟ注進有之旨、浦賀奉行ゟ達有之候ニ付、早速物見船差出爲見屆候所、一向帆影茂不相見候趣、大津陣屋詰家來之者ゟ申越候、此段致御屆候、以上、

二月四日

御（松平典則・川越藩主）名

一阿部伊勢守殿より、右同斷寫一通爲御案内右同人持參之、御用人太田三藏を以差出候處、被成御落手之旨、以同人被仰聞之、

一御相持御三手より右同斷寫一通ッヽ、爲御案内御留守居共ゟ以紙面申遣之、

但、浦賀御奉行より も同斷可差出之所、爰元ニ御壹人も御出無之ニ付不差出、

一御年寄大御目付篠山攝津守殿より左之御屆書壹通、以御使者可相勤之處、例之通相勤候形ニ宜取計呉候樣、用人迄御留守居共ゟ以紙面賴遣之、

一昨二日申中剋城ヶ嶋沖合ニ異國船壹艘相見候段、三崎詰ゟ注進有之旨、浦賀御奉行樣ゟ御達有之候ニ付、早速物見船差出爲見屆候所、一向帆影茂不相見候趣、大津陣屋

詰家來之者ゟ申越候ニ付、海岸御掛御月番松平伊賀守樣より御屆申上候ニ付、此段申上候、

以上、

二月四日

御名家來

平野武之助

○中略、

五日、晴、

一海岸御掛御月番松平伊賀守殿より、昨四日卯中剋頃異國船壹艘松輪沖ニ相見候段、今曉寅中剋相劔表ゟ注進有之ニ付、左之御屆書壹通、御留守居代谷貝純一郎持參之、御取次山田官兵衞を以差出候處、被成御落手之旨、同人を以被仰聞之、

昨四日卯剋頃、異國船壹艘松輪沖ニ相見、追々乘入候樣子ニ有之旨、井伊掃部頭家來ゟ通達有之候段、大津陣屋詰家來之者ゟ不取敢注進申越候、此段致御屆候、以上、

二月五日

御名

一阿部伊勢守殿御勝手より、右同斷寫壹通爲御案内右同人持參之、御用人渡邊莊兵衞を以差出候處、被成御落手之旨、同人を以被仰聞之、

一御相持御三軒より右同斷寫壹通ッヽ、爲御案内御留守居共ゟ以紙面遣之、

安政元年二月六日

但、浦賀御奉行へも御案内可差出之處、此節浦賀御奉行御兩人共浦賀江出張中ニ付、
御案内不差出事、

一御年寄大御目付　篠山攝津守殿江、左之御屆書壹通名入以御使者相勤之、
但、本文之通可有之處、例之通用人迄御留守居共ゟ以紙面賴遣之、
昨四日卯中刻頃、異國船壹艘松輪沖ニ相見追々乘入候樣子ニ有之候旨、井伊掃部頭樣
御家來ゟ通達有之候段、大津陣屋詰家來之者ゟ不取敢注進申越候段、海岸御掛御月番　松
平伊賀守樣江御屆申上候ニ付、此段申上候、以上、

御名家來
高橋源五

二月五日

○中略、

一海岸御掛御月番　松平伊賀守殿江、今朝之異船猶又注進有之ニ付、左之御屆書壹通、鷲尾金右
衛門持參之、御取次　飯塚勝之助を以差出候處、被成御落手之旨、同人を以被仰聞之、
今朝致御屆候相州松輪崎沖ニ相見候異國船壹艘碇泊致、尤亞墨利加類船之趣ニゟ、大
筒貳拾貳挺据有之、風模樣次第早速江戸表江罷越候段、手眞似致候趣、浦賀表ゟ申越
候旨、神奈川出張之浦賀奉行ゟ達有之段、同處出張之家來之者ゟ申越候、此段致御屆
候、以上、

二月五日

御名

一阿部伊勢守殿御勝手江、右同斷寫壹通爲御案内、右同人持參之、御用人　渡邊三太平を以差
出候處、御落手被成之旨、同人を以被仰聞之、

一御相持御三軒江右同斷寫壹通ッヽ、爲御案内御留守居共ゟ以紙面遣之、
但、今朝之通、

一御年寄大御目付　篠山攝津守殿江左之御屆書壹通、名入以御使者相勤之、
但、今朝之通取計之、
今朝御屆申上候相州松輪崎沖ニ相見候異國船壹艘碇泊致、尤亞墨利加類船之趣ニゟ、
大筒貳拾貳挺据有之、風模樣次第江戸表江罷越候段、手眞似致候趣浦賀表ゟ申越候旨、
神奈川御出張之浦賀御奉行樣ゟ御達有之段、同所出張之家來之者ゟ申越候ニ付、海岸
御掛御月番　松平伊賀守樣江御屆申上候、此段申上候、以上、

御名家來
小倉錄之助

二月五日

六日、曇、○中略、

一海岸御掛り月番松平伊賀守殿江、左之御屆書壹通、鷲尾金右衞門持參之、御取次堀江猶人を以差出候處、被成御落手之旨、以同人被仰聞之、

相州松輪崎沖ニ相見候異國船壹艘、昨五日朝ゟ帆を卸間切居、昨夕方迄ニ内海之方江乘入、觀音崎ゟ壹里程沖合江碇を卸候樣子ニ相見候段、大津陣屋詰家來之者ゟ申越候、此段致御屆候、以上、

二月六日

御名

一阿部伊勢守殿御勝手へ、右同斷寫一通、右同人持參之、御用人太田三藏を以差出候處、被成御承知旨、以同人被仰聞之、

一御相持御三手江、右同斷寫一通ッヽ、爲御案内御留守居迄御留守居共ゟ紙面を以遣之、

但、浦賀御奉行爰元ニ御壹人も御出無之ニ付、不差出、

○中略、

七日、曇、○中略、

一海岸御掛御月番松平伊賀守殿江左之御屆書一通、鷲尾金右衞門持參之、御取次笈川久太を以差出候所、被成御落手候旨、以同人被仰聞之、

昨六日申之下剋頃、亞墨利加船七艘之跡船壹艘、本牧沖江乘入碇泊致候旨、組之者見

屆注進申出候旨、神奈川出張之浦賀奉行ゟ達有之候段、同所出張之家來之者ゟ申越候、此段致御屆候、以上、

二月七日

御名

一阿部伊勢守殿御勝手江、右同斷寫一通、右同人持參之、御用人渡邊莊兵衞を以差出候處、被成御落手之旨、同人を以被仰聞之、

一御相持御三手江右同斷寫壹通ッヽ、御留守居迄御留守居共ゟ爲御案内紙面を以遣之、

〔川越藩主松平典則屆書〕○東京帝國大學所藏本如是我聞所載

○二月六日大目付へ

昨朝御屆申上候相州松輪村沖ゟ相見候異國船壹艘碇泊致ー候、尤アメリカ類船之趣、大筒貳拾貳挺据へ有之、風模樣次第早速江戸表へ罷越候手眞似致ー候趣、浦賀奉行ゟ達有之候付、伊賀守殿へ昨夜御屆申上候、以上、

二月六日

松平肥後守ゟも同文言御屆書略之、

〔會津藩主松平容保屆書〕○東京帝國大學所藏本如是我聞所載

○二月四日大目付へ

松平誠丸

一昨二日城ヶ崎沖合異國船一艘相見候旨、房州白子濱沖合ニ異國船一艘、申酉之方へ向走り候旨、且七艘之異船ハ本牧横濱沖へ相集候旨、御用番へ御屆申上候、以上、

二月四日　　松平肥後守

（續通信全覽　沿海紀憂　異國船紀聞　陣營日記）

〔會津藩主松平容保屆書〕（○維新史料編纂會所藏本　陣營日記所載）

○二月六日老中へ

異國船壹艘松輪沖江碇泊致ー、尤亞墨利加類舟之趣こる大筒貳拾二挺有之由、模樣次第早々江戸表江罷越候由手眞似致ー候趣、浦賀奉行ゟ出張家來之者江達候段、御屆申上候、以上、

二月六日　　松平肥後守

〔忍藩主松平忠國屆書〕（○帝國圖書館所藏本　德川幕府書類外國事件書所載）

○二月七日老中へ

寅二月七日、松平伊賀守（忠優老中）殿ニ御屆寫、

昨六日申下刻比亞墨利加船七艘之跡船壹艘本牧沖江乘入致碇泊候旨、組之者見屆注進申出候趣、神奈川驛伊澤美作守ゟ爲心得達有之、且今朝御屆申達候小柴沖ニ紛居候異國船、本牧沖之方を向乘入、七艘之船ニ一纏ひニ相成船懸致し候由、番船罷在候者ゟ申出候段、神奈川表家來之者ゟ申越候、此段御屆申達候、已上、

二月七日　　松平下總守

〔佐貫藩主阿部正身屆書〕（○東京帝國大學所藏本　如是我聞所載）

○二月五日老中へ

昨日御屆申上候去ル二日城ヶ崎沖合へ相見候一艘之夷船、四日卯ノ下刻松輪沖合ゟ浦賀之方を向乘入候樣子ニ候、御領分海岸出張罷在候家來之者申越候、此段御屆申上候、以上、

二月五日　　阿部駿河守

〔岩槻藩主大岡忠恕屆書〕（○外務省所藏本　續通信全覽所載）

○二月五日老中へ

私領分安房國朝奈（夷カ）郡和田村凡四里程沖合ふ、去ル二日巳刻頃異國船壹艘相見候所、西之方へ向相走り候、尤帆數船形等雨天ふる霧深聢と難相分、午刻頃追々西之方へ走り行、其後帆影も相見不申候へとも、去月廿八日御屆申上候通、濱手人數差出、彌無油斷警衛罷在候段、彼地家來共ゟ申越候、此段御屆申上候、以上、

二月五日　　大岡兵庫頭

〔勝山藩主酒井忠一届書〕○外務省所藏本 續通信全覽所載

○二月五日老中へ

一昨三日夜御届申上候房州洲之崎沖ゟ相見候異國船壹艘、昨四日辰刻頃相州城ヶ島ゟ壹里半程之沖合ゟ相見、帆柱三本建、凡三拾四五間も可有之哉、浦賀之方へ向乘込候樣子之旨、遠見之者申出候、依之在所勝手濱(山カ)方無油斷警衛罷在候段、彼地家來共ゟ申越候、此段御届申上候、以上、

二月五日　　酒井安藝守

〔神奈川驛名主間瀨源右衛門等書翰〕○維新史料編纂會所藏本 陣營日記所載

○二月四日高知藩士原半左衛門等宛

二月四日、神奈川飛脚控、

異船壹艘一昨二日夕、三崎沖江相見、江の嶋の方江乘候由、昨三日未明、浦賀御番所ゟ見届船乘出候處、昨夕迄不戻、いづ迄右船乘戻り次第、否可相知候得共、江之嶋之方江乘候異船壹艘も無相違見届候旨、浦賀ゟ昨夜出ーて書狀今朝届來候、此段御通達申上候、右之外異船渡來可有之哉、猶追々爲知次第可申上候、以上、

二月四日　未刻下　　勝見利

土州樣鮫洲御陣屋
原　半左衛門樣
廣瀨　傳八郎樣

間瀨源右衛門

○二月六日同人宛

二月六日、神奈川飛脚控、

昨日申上候浦賀入之異船壹艘、今申下刻、本牧沖江乘來り、神奈川沖碇泊類船之沖手江致碇泊候、明日頃ゟ懸り場所居替り神奈川邊江乘寄候ゟ難計、矢張アメリカ船ニ無相違候、不取敢唯今之姿御注進申上候迄如此御座候、以上、

寅二月六日　酉上刻　　間瀨源右衛門
原　半左衛門樣　　勝見利
廣瀨　傳八郎樣

〔小倉藩横濱日記〕○伯爵小笠原長幹所藏本

安政元年二月六日

二月五日、

一今朝、伊澤(政義浦賀奉行)様御呼出ニ付、兵馬罷出候處、御用人源藏を以左之御書付壹通御渡被成候、

昨朝、相州松輪崎沖異船壹艘碇泊致ー、尤亞墨利加類船之趣こる、大筒廿貳挺据有之、風模様次第、早速江戸江罷越候段手眞似致ー候之趣、今曉浦賀表ゟ申越候間、爲御心得此段申達候、

二月五日

猶應接組之者爲乘込、可相成丈引留置可申諭中御座候得共、類船御座候故、行屆申間敷旨申來、

右ゟ江戸表江之御屆ゟ不致方ニ、眞田様衆申談之上取極候得共、御達面ゟ差廻之、

二月七日

〔金澤武藏藩主米倉昌壽屆書〕○東京帝國大學所藏本 如是我聞所載

○二月七日大目付へ

昨六日午中刻比異國船浦賀方ゟ乘込、領分武州金澤乙艫濱ゟ二里半程沖合ニ碇泊致ー罷在候處、同日申刻比本牧之方へ差向致ー出帆候旨、在所家來共ゟ注進申越候付、御用番へ御屆申上候、以上、

二月七日

米倉丹後守

〔鳥取藩主池田慶德屆書〕○縣立鳥取圖書館所藏本 鳥取藩從江戸之日記寫所載

○二月七日老中へ

一左之趣御懸り御月番松平伊賀守殿ニ被成御屆候段、御留守居申達之、

昨夜御屆申達候異船壹艘、昨朝ゟ猿嶋沖を乘廻り居り候處、同申ノ中剋拙者持場沖ニ艙込候様相見候旨、持場詰家來之者ゟ注進申越候、此段御屆申達候、以上、

二月七日

松平相模守

今朝申達候亞墨利加船壹艘、本牧沖を艙通り、夜ニ入、先船七艘之場所江乘込候段、持場詰家來之者ゟ只今注進申越ー候、此段御屆申達候、以上、

二月七日

松平相模守

〔明石藩主松平慶憲屆書〕○子爵松平直平所藏本 明石藩日記所載

○二月七日老中へ

一御懸り松平伊賀守様ニ、今朝左之通御屆書被差出候旨、奏者番申聞之、

烏ヶ崎沖ニ繫船仕候異國船壹艘、追々乘込、本牧沖神奈川遠沖邊ニる晩景相成、船繫仕候場所相分り不申候、猶相分次第可申越旨、神奈川江差出置候家來之者ゟ申越候、此段御屆

申上候、以上、

二月七日　　松平兵部大輔

〔ペリー日本遠征記〕○ホークス編

Francis L. Hawks: Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by Order of the Government of the United States. Washington: 1856. Vol. 1. pp. 341–342.

The arrival of the Saratoga, on the fourth of March, was quite an event to all the officers and men in the squadron, who, confined to the narrow limits of an anchored ship, month after month, with no variety in the daily routine of duty, and no change of scene from the monotonous view of the same look-out from deck, gladly welcomed anything that could break up for a moment the tedium of their life. The Saratoga had experienced very severe weather, which those in the squadron, although sheltered in a safe anchorage could readily understand, for the season, even in the bay, had given evidence enough of its rude inclemency. Frequently the wind was so high and the waters of the bay so disturbed, that the surveying boats were obliged to intermit their labors. The frequent recurrence of rain, alternating with an occasional snow-strom, and a cold temperature more penetrating to the sensations, from its moisture gave all a very disagreeable experience of a Japan winter.

. . . . . .

According to agreement, Sam Patch was brought forward and presented to the Japanese officials, and no sooner did he behold these dignitaries than he prostrated himself at once, apparently completely awe-stricken. Sam had been frequently laughed at during the voyage by his messmates, and teazed by statements of the danger to which his head would be exposed on his arrival in his own country, and the poor fellow possibly thought his last hour had come. Captain Adams ordered him to rise from his knees, upon which he was crouching with the most abject fear and trembling in every limb. He was remined that he was on board an American man-of-war, perfectly safe as one of her crew, and had nothing to fear; but it being found impossible to reassure him while in the presence of his countrymen, he was soon dismissed. But more of Sam hereafter.

福井藩主松平慶永越前守　豫メ米艦ノ警備地品川御殿山前ヲ通航スル際ノ措置ヲ候ス。幕府、應接中ノ故ヲ以テ穩便ニ處置セシム。八日

異船警備地前通航ノ際ノ處置ヲ伺フ

〔福井藩伺書〕○内閣記録課所藏本合同船入相秘記所載

○二月六日老中へ

今度渡來之異國船、萬々一次第ニ内海江乘込、自然越前守（品川御殿山）持場前、一之御臺場（川越藩警備）内乘通候儀御坐候節ハ、如何相心得可申哉、此段奉伺候、以上、

松平越前守（慶永、福井藩主）内
大道寺七右衛門

老中指令未ダニナシ
青年藩士ノ憤激

二月六日

〔合同船入相秘記〕○松平慶永手記内閣記録課所藏本

二月七日、卽西國暦一千八百五十四年第三月第五日、北亞美利駕共和政治州獨立建國以來七十九年、

今日用事有之、持場へ土屋十郎右衞門指越、

昨日伊賀守（松平忠優、老中）へ留守居罷越、内海乘入候節之心得方相伺置候處、未ゟ御指圖無之、且又、品川持場若ゟ者共ハ、何分壹ノ御臺場乘通候ハヽ、何分ニも押留、夫ニて不聞入候時ハ決雌雄、指殺可申抔、甚意氣込强く、佐々木權六抔ハ、壹ノ御臺場へ上り候ゟ、其儘ニハ不致置由申立候由、且又、昨日七（大道寺、家老）右衞門伊賀守公用人へ引合、此方ニゟ筏を數十組立流ー置、彼ノ妨ニ相成候樣可致抔申候由、申候得ゟ、公用人甚不可然儀ニて、是非其内ニゟ御指圖も可

公用人ノ釋明

中根ヲ遣シ藩士ヲ慰諭セシム

有之、夫迄之處ゟ、假令洋面乘込候とゝも御見逃ー被成候ゟ、於公邊ゟ御無調法ニゟ不相成と申事、右等之儀を持場へ申越候へハ、彌落著不申事ゟへ、今朝より種々山城（紀、家老）始一同致評議居候事ニ候、依之我等申候ゟ、未ゟ御指圖も無之儀ニ候へハ、何分明朝伊賀守へ罷越候て催促ゟをー、迚も其儘ニ夷奴乘込候を見過ーニ相成候儀ゟ難相成、若々右樣之御指圖ニゟも私ニ置、御請も可仕心躰無之よー、私儀ゟ承服仕候ゟもせよ、持場詰家來之者へ申渡候儀ゟ不相成候間、如何相心得可申哉、將又洋面乘入候を取押候も、平穩ニ可成丈可仕心躰ニゟ有之候得とも、彼不聞入候時ゟ、炮煩を以て相制ー候より外他算無之、左をれゟとりもなをさゝを兵端相開候道理ニ相成候間、甚以當惑心痛可仕段申立候ハヽ如何ゟるーー可然哉、山城・靭負（中根師貞、側用人）申候ハヽ、至極御尤之御儀ニ候へ共、左樣ナラハ御殿山へ罷越、心得不爲致候半ゟゝ難相成、右之趣共打明ケ申談候ハヽ可然段之評議相極り候て、直ニ乘馬ゟて爲夫靭負持場へ指越、○中略、

靭負申達候ハヽ、今朝思召之趣早速三郎（山口、家老）兵衞へ申聞、番頭始夫々へ申談候處、壹ノ御臺場外ニ候ハヽ、御持分ニ無之ニ付、御構被成す内ニ候得ハ、彼軍船指留候儀ゟあゝり前ニ候へ共、必度喰留候所甚六ケ敷、且又、御差圖無之内、萬一血氣ニゟやり候ゝ兵端を開候ゟも不相濟、甚六ケ敷事ゟへ、先御指圖有之候迄ハ御待被遊、明日被爲入候義ハ御延引被遊候方

御尤ニて、御指圖之上と被遊候様一統相願候段申達、就夫明日之逢對ニ相止ム、衆、同意ニ付、何も子細無之由、勢負申聞之、

八日、泰西三月六日、

○中略、

異國船持場前、一之御臺場内乗通候節心得方之義、伊賀守へ伺書差出置候處、今夕同處ニ

老中指令

る書取を以差圖有之、左之通り、

當時應接中之儀ニ付、持場内乗通り候共、平和ニ候ハヽ穩便ニ取計候様可仕候事、

老中ノ内意

七右衞門穩便と申趣意、公用人へ相尋候處、公用人答出來兼候由ニる、内へ入り、又々罷出申聞候ハ、此穩便と申所ニハ主人伊賀守も甚被込候義ニて、先番船抔を出ー置、手招を以ヽ彼へ申諭ー、ソレヽも承知不致乗込候ハヽ、番船跡より付參り候様ニとの事ニ候、尤御持場前乗込候を其儘ニ被成置候るも、決る御無調法ニハ不相成候段、陸固メニるも宜敷、内々伊賀守被申候、

七日丙子　故征夷大將軍德川家慶慎德院ノ廟所立柱等日時定。尋デ、上棟遷座日時定ヲ行フ。

〔老中阿部正弘等連署書翰〕○孝明天皇紀所載

○正月二十五日京都所司代脇坂安宅宛

二月二日、自淡路守差越、詣殿下入覽、四日被聞食旨被仰出、

一筆令啓候、慎德院様御廟御拜殿御造立ニ付、立柱御日取陣之儀御願被思召候旨上意候、右之趣、傳奏衆へ可被相達候、恐々謹言、

正月廿五日

内藤紀伊守（信親、老中）
松平伊賀守（忠優、老中）
牧野備前守（忠雅、老中）
久世大和守（廣周、老中）
松平和泉守（乘全、老中）
阿部伊勢守（正弘、老中）

脇坂淡路守様

〔公卿補任〕

二月七日、慎德院拜殿造作立柱日時定、上卿萬里小路中納言正房、辨左少辨經之（中御門）、奉行長順（壬生）、

所立柱日時定

〔非藏人日記 乾〕○東京帝國大學所藏本

二月七日、丙子、雨、當番議奏廣幡右大將(基豊)殿、傳奏兩卿參侍、

一關東慎德院拜殿造立陣儀也、辰剋有獻、上卿萬里小路中納言正房卿、辨中御門經之、奉行葉室辨長順、藤原助胤(藤島中務大丞)等剋限參侍、

一臺盤所　奏聞、內侍塞有之、

一南殿御後東西辛戸開虎間格子上妻、兼日自奉行有命、

一虎間獻堯寬正性役之、

〔橋本實久日記〕○京東帝國大學所藏本

二月七日、丙子、雨、自去夜伺候巳下剋退出、今日慎德院贈太政大臣家慶公靈屋拜殿造作立柱日時定有陣儀、辰剋過、上卿萬路小路中納言、予申沙汰雜事、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記　宮內省圖書寮所藏本

二月七日、宿後朝退出、

傳聞、今日慎德院　故家慶公　靈屋立柱日時定陣義云々、上卿萬里小路中納言正房云々、先例中納言第一云々、然而比之第一姉小路中納言之處、正房卿依出願彼卿出仕云々、下行二十石云々、末代之義每支如之、不可說〳〵可難〳〵、辨經之、奉行長順云々、

〔平田職寅日記〕○宮內省圖書寮所藏本

二月四日、癸酉、陰、

一葉室辨殿御招、非藏人口へ職(平田)修伺公御面會、

來七日、慎德院拜殿造立立柱日時定、如例可沙汰交名可差出候事、

右御達之、

○中略、

五日、甲戌、快晴、

○中略、

一催方へ來七日慎德院殿拜殿造立々柱日時定陣儀、以秀平觸遣之、

一大針房之助へ右陣儀ニ付殿上疊一座分六日中持來之樣申遣之、

一葉室殿ゟ剛紙五枚、今日早速調遣之樣申來之、

右調進之事圖書寮藤井へ申遣之、

一藤嶋極藺ゟ剪紙貳通到來、

○中略、

追伸

可爲慎德院拜殿造作立柱

日時定刻限辰一點奉行權右中辨候也、
卯半刻無遲々可被催候也、
上包　出納殿

一大外記（押小路師生）を以使慎德院殿拜殿立柱日時定陣儀御下行草帳示談申來之、承知之旨申之帳面返却之、

○中略、

七日、丙子、雨下、

一慎德院殿拜殿造作立柱日時定陣儀ニ付、卯刻予職修著束帶出仕、

御藏　生春　職敬
小舍人　能弘　孝正
所衆　秀伴　菅原爲恭　各束帶

殿上渡廊鋪設如例（殿上疊新調申付之、）散狀次第被渡之、辰半刻被陣始、奉行下小板鋪出陣、次奉行葉室辨殿取日付勘文被還參於西面　奏聞了、被返之了、巳刻極蔵面會撤却退出被申之、仍撤却各退出了、

上卿　萬里小路中納言正房卿

奉行　葉室權右中辨長順
辨　中御門左小辨經之

〔表右筆言次〕（○內閣記錄課所藏本）

二月廿一日、○中略、

一明日差立

慎德院樣御廟　御拜殿　御造立　御柱立ニ付、御日取御會釋奉書（所見ナシ）、伊勢殿（阿部正弘、老中）江廻ル、御判濟候ハヽ、明朝御城江被下樣申上候、（奉書日附十九日過なれハ、幾日ニても宜旨、金八郎申聞候、）○中略、

廿二日、○中略、

一三條大納言息前中納言（公睦）去ル十一日死去、廿日之段尤被混穢候、右引籠中書翰往復等坊城前中納言（俊明、武家傳奏）一名を以可被申聞旨被申越候旨、所司代より（去ル十三日出昨廿一日）到來之書狀茂輔持參、戸棚江張出ー置候、

一京都飛脚永井岩之丞（伺志、日付）江渡、

御柱立ニ付、御日取御會釋奉書、一〆幸次郎、

一御柱立御會釋之奉書ニ兩卿江も有之候處、前文三條大納言（實萬、武家傳奏）混穢ニ付、金八郎（志賀、奥右筆）江も談候處、兩卿ゟ有之事故差支ハ有之間敷候得とも、爲念所司代江此方より手紙添呉候樣申聞候、

依之手紙案爲見候上差立候、尤差支有之候節不申上ーてハ取計兼候ハヽ、御懸りゟ申上
吳候樣、（高木、東右宅）幸次郎ゟ談、則備前守（牧野忠雅、老中）殿ゟ申上候得ゝ、傳奏ゝ有之候得ゝ宜候得共、兩卿ゝ有事
故如何候哉、まこの一日數相立候ハヽ達ー候哉之處も難計、先手紙添差立候樣、尤差支有
之候ハヽ、申越次第引替候樣、被　仰聞候旨、申聞候、

〔公卿補任〕

六月三日、愼德院拜殿上棟影開眼供養等日時定、上卿日野中納言（資光）光政、辨豐房、奉行長順、
同日、愼德院影遷座塔供養等日時定、上卿中山大納言忠能、辨經之、奉行胤保朝臣（廣橋、頭右中辨）、
七月四日、愼德院影開眼遷座塔供養等日時定（依東國地動延着、日時不合期之間被行）、上卿德大寺大納言公純、辨長
順、奉行光愛朝臣（柳原、頭左中辨）、

〔非藏人日記　御詰言渡〕（○東京帝國大學所藏本）

六月一日渡、○中略、
一愼德院拜殿上棟影開眼供養等日時定ニ付、明後三日卯半刻、近衞殿四脚門外附武士警固
之事、葉室殿被命、
一同院影遷座塔供養等日時定ニ付、同日辰半刻、附武士警固之事、右日向ゟ可申渡之旨被
命、則取次（小佐治石見守）へ申渡候、
但、相揃次第近衞家ゟ可申屆、左候ハヽ、四脚門可開候間、無違可屆被示、是又申渡候、
○中略、
七月三日渡、○中略、
一愼德院殿拜殿上棟以下日時勘文　宣旨納筥、去五月廿九日之通、可申付、傳奏衆被命、賄
頭（權十郎）へ申付、令別記、○中略、
一愼德院影開眼遷座塔供養日時定ニ付、明四日辰刻近衞殿四脚門外附武士警之事、柳原殿
被命、取次（土山安キ守）へ申渡候、
一前件自傳奏衆被　仰付候愼德院殿　宣旨納筥御急キニ付、明四日午半刻迄ニ出來候樣、
更ニ三條殿以家來申來ニ付、口向早速取調候處、御筥ゝ過刻受書差上候通、御受申上候へ
共、御紐之處ハ、先規トハ相替、絹萌黃眞田ニて御用捨ニ預度旨、勘使申出、此趣三條殿
以家來申遣候處、御承知候、仍令別記、

〔非藏人日記　乾〕（○東京帝國大學所藏本）

六月三日、庚午、晴、當番議奏橋本前大納言殿（實久）宿退出、加勢山科三位殿（言成）、傳奏衆參侍、
一今辰刻、愼德院上棟陣之儀、有獻、元績・正直、

一同日巳刻、愼德院殿御影遷座塔供養ニ付、陣之儀、有獻、良祥・經宜、此陣之儀、近衞殿於宸殿有之ト云々、

○中略、

七月四日、辛丑、晴、當番議奏廣橋前大納言殿、傳奏衆參侍、○中略、

一愼德院殿御影開眼遷座塔供養陣之儀、去月三日雖有之、今日巳刻再被改行、陣之儀於近衞殿寢殿

上卿德大寺大納言公純卿辨葉室辨長順奉行職事柳原頭辨光愛朝臣等也、

〔非藏人日記　坤〕○東京帝國大學所藏本

六月三日、庚午、晴、議奏當番橋本前大納言殿、宿番加勢山科三位殿、傳奏衆參仕、

一愼德院影遷座塔供養等日時定陣儀、上卿中山大納言忠能卿、辨中御門辨經之、

一同院拜殿、上棟、影開眼供養等日時定陣儀、上卿日野中納言光政卿、辨清閑寺辨豐房、

○中略、

七月四日、辛丑、晴、當番議奏廣橋前大納言殿傳奏衆參侍、○中略、

一愼德院影遷座塔供養等日時定陣儀、上卿德大寺大納言公純卿、辨葉室辨長順、

〔雅俗日簿〕○山科言成日記　宮內省圖書寮所藏本

六月三日、當番參仕、晝夜勤仕、○中略、

傳聞、今日陣儀被行云々、於陽明被行云々、

關東故大樹愼德院殿、永遷座、上卿中山大納言、

靈屋上棟、上卿日野中納言云々、

〔後勁槐記〕○唐橋光成日記　宮內省圖書寮所藏本

六月三日、

一巳刻愼德院拜殿上棟影開眼供養日時定、上卿日野中納言・辨豐房・奉行職事長順、

殿下直廬、鬼間代、

上卿辨先參集于桂皇居、陣被始之節、自近衞家四脚門參入、直上卿著陣之事、但諸司輩嚴儀御場所ハ出仕之事、

奏聞之事、

陣之儀上卿奏聞之由仰之後、取日時勘文就臺盤所代、簾下奏之返賜、此趣節會之度々宣命見下垂命、云々、又陣座上卿不召軾、（人車記仁安）之例を以、中山大納言取殿御氣色治定、但、此例不的當、參祿法等之類、可然殿

午刻愼德院影遷座塔供養等日時定、上卿中山大納言・辨經之・奉行職事胤保、云々、依爲職事中辨召留、下勘文、但、蒙御點、出仕辨名載宣旨雖有近例、虛書不可然、今日中山進退如此、於烏丸ゑ召出仕辨下之、

○中略、

七月三日、

一慎德院拜殿上棟影開眼供養遷座塔供養等日時定陣儀、去三日相濟、勘文宣旨到着、去廿一日拜殿上棟者相濟候得共、影躰道中地震ニ付延着ニ付、影開眼以下延引、守影開眼供養遷座寶塔供養等日取、猶又自關東被願申、更召晴雄朝臣日時勘文明日巳刻可有陣儀、奉行光愛朝臣被仰下、

四日、

一慎德院影開眼遷座塔供養等日時定、上卿德大寺大納言・辨長順・奉行光愛朝臣、

於增上寺影開眼供養日時

今月十四日辛亥時辰

影遷座日時

同　日　時午

寶塔供養日時

同　日　時申

〔日次案〕○宮內省圖書寮所藏本

六月三日、庚午、晴、

此日有　宣下事、辰斜、日野中納言著仗座代奥、長順仰、慎德院拜殿上棟可令日時勘申之由、上卿移著外座召豐房、仰之、如職事、豐房持參日時勘文、上卿披見召史筥、令豐房奏聞、豐房就臺盤所代、簾下　奏聞、被免內覽、奏聞之儀被准節會、宣命見參祿法等奏聞類、御覽了返給、上卿披見仰々詞、上卿下勘文豐房退出、巳斜中山大納言同上、奥、胤保朝臣仰慎德院影遷座塔供養可令日時勘申之由、上卿移著外座、召經之、仰之、如職事、經之持參日時勘文、上卿披見召外記筥、令經之奏聞、一如初、御覽了返給、上卿披見仰々詞、下勘文經之退出、

○中略、

七月四日、辛丑、晴、

茲日有　宣下事、辰斜德大寺大納言著仗座以陽明家爲代、職事光愛朝臣仰慎德院影開眼供養影遷座寶塔供養等可令日時勘申之由、上卿移端座、召辨長順、仰々詞、如職事、長順持參日時勘文、上卿披見召史筥、令長順　奏聞、其儀如去月三日、返給、上卿披見、長順仰々詞、欲退、召留下之、仰々詞長順、退下史、此日時去月三日雖被下宣旨、依震動障不合期、更大樹被願申之間、有此宣下、

幕府、江戸市中平穩ナルヲ以テ、先手頭本多左京・同紅林勘解由等ノ臨時見廻ヲ止メ、四月九日ニ至リ、臨時見廻心得ヲ免ズ。又、魚船問屋ノ注進船ヲ半減シテ三艘ト爲

サシム。

〔町奉行池田頼方伺書〕○帝國圖書館所藏本 德川幕府書類外國事件書所載

○二月七日老中阿部正弘へ

「寅二月七日、御向方ゟ被遣之、對馬守へ申遣ス、」(朱書)

臨時見廻中止ノ件

「伊勢守殿ニ御直ニ上ル」

御先手臨時廻見合之儀奉伺候書付

書面伺之通相心得、御先手ニも可申達旨被仰渡、奉承知候、

寅二月七日　池田播磨守

御年番方
御當番
非常掛
晝夜廻
三廻りへ相廻之

池田播磨守

異國船近海ニ乗入候ニ付、御先手四組ッ、、日々順番ニ相廻候積申合可然旨、御先手頭へ相達、其段去月廿九日申上置候處、亞墨利加船横濱ニおゐて應接ニ付、諸家御固も被仰付候ニ付るも、市中人氣も彌平穩ニる、爲差火事沙汰も無之候ニ付、右御先手四組臨時廻も、先ッ相休候樣可申達哉、猶廻方之儀も、此上之仕儀次第申上候樣可仕奉存候、此段奉伺候、以上、

寅二月

「伊勢守殿荒井甚之丞を以御下ケ、」(朱書)

覽

池田播磨守

伺之通相心得、御先手ニも可被達候事、

〔町奉行池田頼方通達〕○帝國圖書館所藏本 德川幕府書類外國事件書所載

○二月七日先手鐵砲頭へ

「寅二月八日、御向方ゟ被遣之、」(朱書)(南町奉行)

對馬守ニ便之節申遣、

寅二月七日、

御當番方
御年番方
非常掛
晝夜廻
三廻りニ相廻之

紅林勘解由樣「ニ爲持遣ス、」(朱書)
金田式部樣
川井攝津守樣

池田播磨守

臨時御見廻先ッ御見合之儀、先刻御演達相濟候得共、改る別紙之趣御達申候、以上、

安政元年二月七日

二月七日

○別紙

紅林勘解由殿
金田式部殿
川井攝津守殿

池田播磨守

臨時見廻中止

異國船近海江乘入候ニ付、各様四組ッヽ、日々順番ニ御廻之儀、及御達置候處、亞墨利加船於横濱ニ應接ニ付、諸家御固も被　仰付候ニ付るも、市中人氣も彌平穩ニて、爲差火事沙汰等も無之ニ付、各様四組臨時廻も、先つ御見合可被成候、猶御廻り方之儀も、此上之仕儀次第可及御達候、右も伊勢守殿江伺之上、此段及御達候、早々御同役衆江御達可有之候、

二月七日

〔町奉行達〕○帝國圖書館所藏本 德川幕府書類外國事件書所載

○二月八日町名主へ

〔朱書〕「寅二月八日、市中取締掛ニ、御向方ニる御達之旨差出ス」

臨時見廻中止

市中取締掛
年番　名主　共

御先手拾組之内、日々四組ッヽ、頭幷組之もの共、町々相廻候間、其段申渡置候處、市中も彌平穩ニる、爲差火事沙汰等も無之ニ付、御先手廻も一ト先相止候間、右之趣町中江可申通、

寅二月

〔江戸町觸〕○東京帝國大學所藏本 高麗環雜記所載

町觸、

御先手組之内、日々四組宛、頭幷組之者とも、町々相廻り候間、其段申渡置候處、市中も彌平穩ニる、爲差火事沙汰無之ニ付、御先手廻りも一ト先相止候間、右之趣町中江可申通、

二月八日

〔江戸町名主達〕○東京帝國大學所藏本 高麗環雜記所載

○二月五日町々へ

今般御先手衆市中見廻り有之候處、供方中間共之内ニ、かさつ之儀ゑ有之候哉ニ相聞候間、

万一右様之儀有之候ハヽ、南御廻り方江可申上旨御沙汰有之候間、右様之儀有之候ハヽ、
早々可申出候、此段相達申候、

二月五日　　名主

○先手頭紅林勘解由ノ手記ヲ、便宜次ニ收ム。

〔浦賀表江亞墨利加船渡來ニ付臨時見廻り一件〕○紅林勘解由手記　維新史料編纂會所藏本

若年寄申渡寫廻送

嘉永六丑年十二月廿六日、

追啓廻狀致三觸候、

以廻狀致啓上候、然ゝ當御番從御目付中、遠藤但馬守殿（泰次、若年寄）御渡候御書付、荒井甚之丞（泰右、筆組頭）ヲ以
御下ヶ被成候由ニる差越候間、右御書付江致承付差遣寫相廻申候、

覺

石川將監（先手弓頭）
永井能登守（先手弓頭）
坂井右近（先手弓頭）
本多左京（先手鐵炮頭）
紅林勘解由（先手鐵炮頭）
金田式部（先手鐵炮頭）
松平藤十郎（先手鐵炮頭）
戸川日向守（先手鐵炮頭）
川井攝津守（先手鐵炮頭）
内藤甚左衞門（先手鐵炮頭）

右明廿七日五時、
御城江罷出可被在之候事、
但、御用又ハ病氣其外ニる難罷出者ハ、罷出候者之内ニる名代相心得可申事、
一同廿七日、吹上御門、明日ハ、直ニ
御殿江罷出候處、左之通、

石川將監
永井能登守
坂井右近
本多左京
紅林勘解由

老中申渡
市中臨時見廻ノ件
町奉行池田頼方書翰

浦賀表江異國船渡來候ハヽ、市中其外動搖可致義難計候間、其節臨時見廻り被　仰付こる可有之候、一組與力拾騎同心弐拾人ツヽ之積相心得、成丈人撰致ー、一旦加役方相勤候ものをも取受、人數相極置候樣可被致候、委細之儀ハ町奉行幷久須美六郎左衛門江も打合置候樣可被致候、先此段内意相達候事、（佐渡守）

右之通於桔梗之間、阿部伊勢守殿以御書付被仰渡、遠藤但馬守殿侍座、

一同廿九日夜ニ入、池田播磨守ゟ左之通申越候ニ付、連名兩人江相廻ス、

勘解由樣　　金田式部
式部樣　　松平藤十郎
攝津守樣　　戸川日向守
　　川井攝津守
　　内藤甚左衛門
播磨守

益御勇健奉賀候、然ハ過刻御内話之一條ニ付、猶今日伺置候儀等も御座候間、先刻之

御伺書ハ先其儘御浮置こる、明日御登　城被成下候樣奉願上候、品々存付候儀等も有之、急々御内談仕度、何卒明日小子義も早メ登　城仕候る御上り以前御内談可仕候、

十二月廿九日

一右ニ付同晦日、此方・金田式部・川井攝津守登　城致ー、池田播磨守江致内談、左之通伺書遠藤但馬守殿江、以常阿彌致進達候、

「但馬守殿
　上

印封

御先手

承付
書面伺之通相心得可申旨、以御書取被仰渡、承知仕候、
正月六日　　御先手

御内慮奉伺候書付

浦賀表江異國船渡來候ハヽ、市中臨時見廻り可被　仰付御内意こる、與力拾騎同心貳

御先手

安政元年二月七日

拾人ッヽ之積相心得候様被　仰渡奉畏候、

右ニ付、左之通御内慮奉伺候、

本多左京組
　與力拾騎
　同心五十人
内藤甚左衛門組
　與力拾騎
　同心五十人
石川將監組
　與力拾騎
　同心三十人
戸川日向守組
　與力六騎
　同心四十人
永井能登守組

　與力六騎
　同心三十人
松平藤十郎組
　與力六騎
　同心三十人
紅林勘解由組
　與力五騎
　同心三十人
金田式部組
　與力五騎
　同心三十人
坂井右近組
　與力五騎
　同心三十人
川井攝津守組

見廻與力同心人數ノ件

右之内、諸出役與力七人同心七拾壹人有之、同心之儀ハ一組貳拾人ニ餘り候得共、與力之儀ハ見習勤之者七人御座候、前書騎附之通、與力人數引合候得共、一組拾騎ニ相成候ゟ、與力三拾貳人不足仕候ニ付、右有人數ニ為見廻可申哉、殘り當番組ゟ加役組助之振合ニ助取可申奉存候得共、左候ゟ多人數之義ニ付、當番方差支ニ可相成ゟ奉存候間、有人數ニ為相勤可申哉、且又萬一組々之内足痛之者御座候ゟ、其節見廻り等難相勤者御座候節ハ、殘當番組之内ゟ人撰仕引替為相廻可申哉、此段奉伺候、以上、

與力五騎
同心三十人

先手頭通達

丑十二月

一同日、於中御門、此方・金田式部・川井攝津守三人申合、左之通取調、池田播磨守ニ達置候、

池田播磨守殿

御先手

見廻持場ノ件

拙者共拾人廻り方被仰付候得ハ、江戸市中不殘、其外日々晝夜とも廻り持場相極メ、一同供連例、遠

與力同心著服ノ件

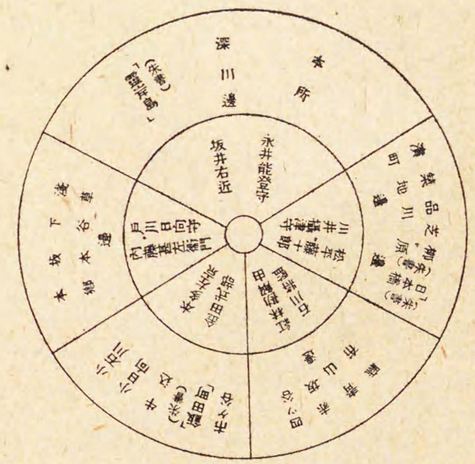
御成之節之振合ニ為相廻り可申心得ニ御座候、

一與力同心着服之儀ハ、町奉行方加役方ニ紛不申候方可然哉之趣ニ付、與力踏込同心役羽織着用為致候積ニ御座候、

十二月晦日

本多左京
紅林勘解由
金田式部
石川將監
永井能登守
坂井右近
松平藤十郎
戸川日向守
川井攝津守
内藤甚左衛門

目付書翰



嘉永七寅年正月五日、中御門當番本多大膳ゟ左之書面爲持差越ス、

別紙書面ゟ御書取添相達候樣、但馬守殿早川庄次郎ヲ以被成御下ヶ候間、爲持差遣候

御書取之趣致承付、同人ヲ以御返上可有之候、以上、

當番

紅林勘解由廻狀

臨時見廻ニツキ明日集會ノ件

正月五日

中御門

當御番中

覺

御目付中

伺之通、可被相心得候事、

一同日、右ニ付明六日五時揃ニる十人寄合之義、勘解由方ニる廻狀致貳觸候、尤本多左京ゟ以別紙申達候ニ付、廻狀致除名候、

御同役中

紅林勘解由

追啓廻狀致貳觸候

以廻狀致啓上候、然ゟ此度臨時廻り之儀ニ付、先達る遠藤但馬守殿ゟ相伺候書面ゟ、伺之通可心得旨以御書取被仰渡候、右ニ付御相談申度儀有之候間、明六日五時揃ニる中御門御番所ゟ御寄合可被下候、廻狀御順達、留之從御方御返被成候、以上、

安政元年二月七日

臨時見廻ニ關スル申合書

正月五日

紅林勘解由

九人宛

一同六日、拾人寄合ニ付左之通相談取極ル、尤承付返上ハ金田式部於　御殿、但馬守殿江
早川庄次郎ヲ以上ル、廻狀ハ本多左京方ニ差出ス、左之通、
以廻狀致啓上候、然ハ此度臨時廻り方之儀ニ付、伺書幷ニ御相談書類六通縅添相廻申
候、早々御順達、留之御方ハ御勘解由方江御返可被成候、以上、

紅林勘解由
本多左京

正月七日

八人宛

伺書幷御書取、廻り桁共前ニ有之候ニ付、略之、
一寺院等江下宿取不申、廻場之内最寄番屋ニ休足致ー、直ニ相廻可申事、
一晝廻り之者、夕七時頃ニも相成候ハヽ、引取支度致ー、夜廻り之者出勤之上、頭ニ成ル與
力ニ成ル、於場所相組之者江面會之上、引取可申候、夜廻り之者も右ニ准候事、
一雨天之節頭附同心六人ハ、桐油笠頭々ニ成ル致用意持參之事、
一同斷之節、與力同心ハ桐油笠又ハ手傘ニ成ル、勝手次第ニ成ル相用可申事、

但ー下駄ハ一切無用之事、
一頭附同心幷與力同心とも、一同腰辨當銘々持參之事、
一頭附同心先廻り刻限以前ニ頭々宅江相揃可申事、
一呑湯之儀ハ廻り場内都合宜番屋ニ成ル相用可申事、尤呑湯無差支差出候樣、兼ル町奉行江
達置可申事、
一廻り場之内組合辻番幷諸番屋江、與力同心手札差遣可申事、
一與力壹人江壹ツヽ、頭目印弓張挑灯相渡可申事、
但、與力附同心江ハ、別段相渡可申候、
「此刻附、跡ニ成ル此方、石川申合ニ成ル取極ル、」（朱書）

幾日（朝五時ヵ夜九時迄）　紅林勘解由組共
（夜九時ヵ翌夕七時迄）　石川將監組共
幾日（夕七時ヵ翌朝五時迄）　紅林勘解由組共
幾日（朝五時ヵ夜九時迄）　石川將監組共
（夜九時ヵ翌夕七時迄）　紅林勘解由組共
幾日（夕七時ヵ翌五時迄）　石川將監組共

安政元年二月七日

此内譯

紅林組

（朝五時ゟ夕七時迄）　輿力三人

（夕七時ゟ夜九時迄）　頭輿力貳人

（夜九時ゟ翌朝五時迄）　輿力三人

（朝五時ゟ夕七時迄）　頭輿力貳人

（夕七時ゟ夜九時迄）　輿力三人

（夜九時ゟ翌朝五時迄）　酉輿力貳人

右之通内譯ニ相成候得ゝ、刻限ゟ半時も早メ出宅こゝる可然哉、

一用人　壹人

一中小性　貳人

一徒士　貳人

一陸尺　四人

一草履取　壹人

一鎗持　壹人

一挾箱持　壹人

一長柄傘持　壹人

一口附　壹人

一沓籠持　壹人

一合羽籠　貳人

一辨當持　壹人

一挑灯持　三人

一用人供　壹人

都合　用人　中小性　徒士　中間

一頭附同心　六人

一輿力　五人

一同附同心　拾四人

一高張挑灯　　貳張
一手丸挑灯　　貳張
一弓張挑灯　　七張
一組渡弓張挑灯　　六張
一頭附同心桐油　　六ツ
一同　斷　　竹笠六ツ
一蠟　燭
一ほらんじ　　用意之事

一頭供立左之通（原本横書）

○高張挑灯　徒士　　○弓張挑灯　同心　同心　　○手丸挑灯　中小性
○高張挑灯　徒士　　○弓張挑灯　同心　同心　　○手丸挑灯　中小性　駕籠
○弓張挑灯　同心　鎗　挾箱　物持　口附　草履取　長柄傘　兼帶　馬沓籠
○弓張挑灯　同心　挑灯持　口附　○弓張挑灯　草履取　口附之内　壹人
合羽籠　同斷　用人　○弓張挑灯　草履取

先手頭申渡
與力同心巡廻ノ節ノ心得

一組々與力同心江申渡書付、本多左京組紅林勘解由組ニ付、外組江之組觸廻狀爲差出候、浦賀表江異國渡來候ハヽ、市中其外日々晝夜共臨時見廻り被　仰付候旨、阿部伊勢守殿被　仰渡候ニ付ゐ、組之者共厚相心得、廻り場内之勿論、其外ニる御威光ヲ以かさつヶ間敷儀等一切無之樣堅く相守り、相組拾組ニる銘々互ニ心付合、聊さり共心障之儀も候ハヽ、他組成とも無遠慮頭々江早々可申聞候、萬一心得違之者も有之心付候狀等閑ニ捨置候ハヽ、當人之勿論其者迄時宜ニ寄申上候る嚴敷申付候間、兼る一同其

先手頭廻狀
町奉行通達ノ件

安政元年二月七日

旨相心得可申候、依之申渡候、

正　月

一同十二日、町奉行池田播磨守ゟ別紙達書壹通金田式部方江差越、同人方ニ〆廻狀相認差越候間、直ニ川井攝津守方へ遣、一覽之上觸付廻狀差出呉候樣申達、廻狀左之通、

以廻狀致啓上候、然ゝ町奉行池田播磨守ゟ別紙之通申越候間、右爲御承知寫相廻申候、早々御順達、留之從御方最寄之方へ御返ー可被成候、以上、

正月十二日

川井攝津守
金田式部
紅林勘解由
池田播磨守

紅林勘解由殿
金田式部殿
川井攝津守殿

町奉行通達
異船浦賀沖渡來ノ件

昨十一日未刻、浦賀表沖貳三里沖合江異國船五六艘渡來致候旨、廻船問屋ゟ注進有之候間、先爲御承知申達候、尤御組之者廻り方等之儀ゟ、猶可及御達候、此段夫々江御通達有之候樣存候、

紅林勘解由
廻狀
臨時見廻先手頭ノ指揮命令ニ關スル町奉行通達ノ件

寅、正　月

一同日夕、川井攝津守自分宅江被相越、池田播磨守ゟ申聞候趣通達有之候ニ付、夜ニ入左之通致廻狀候、尤本多左京江ゝ以別紙申達候、

以廻狀致啓上候、然ゝ今日戸川日向守　御殿江被出居候處、町奉行池田播磨守申聞候ゝ、此節浦賀表沖合江異國船渡來候付、臨時見廻り之御方江御支配方ゟ別段被仰渡も可有之處、御用多ニ付無其儀、播磨守ゟ通達次第持場内相廻候樣、同人申聞候段、日向守ゟ川井攝津守江通達有之、同人ゟ拙者江申聞候旨、爲御承知致廻狀候、右ニ付播磨守ゟ通達次第御廻り可被成ゝ存候、依之致廻狀候、早々御順達、留之從御方御返可被成候、以上、

正月十二日

八　人　宛

紅林勘解由

先手頭廻狀
町奉行通達ノ件

追啓、左京殿江ゝ以別紙申達候、日向守殿攝津守殿ニゝ御承知ニ付致除名候、

一同十四日、池田播磨守ゟ別紙之通申越候間、直ニ廻狀差出候、尤此方ゟ出ス、

以廻狀致啓上候、然ゝ町奉行池田播磨守ゟ別紙書面昨夜中差越候間、爲御承知致廻狀候、御順達、留之從御方御返ー可被成候、以上、

安政元年二月七日

正月十四日

川井攝津守
金田式部
紅林勘解由

但し、金田・川井江向遣し、兩家より廻狀觸付、尤左京方へも別段式部方より通達之義願候、

紅林勘解由様
金田式部様
川井攝津守様

池田播磨守

町奉行通達

異船所在不明ノ件

以手紙致啓上候、然ゝ昨日及御達候、異國船之儀其後帆影等一向相見不申候段注進申出ニ付、爲御心得申進候、夫々江御通達有之候樣致度、此段可得御意如斯御座候、以上、

正月十三日

一同日、此方梅林坂御門當番之處、左之達書差越候由ニる夜九時留守宅より差越候ニ付、御番所より廻狀差出ス、

以廻狀致啓上候、然ゝ只今池田播磨守より別紙之通申越候間、其儘相廻申候、此段爲御承知致廻狀候、早々御順達可被成候、以上、

町奉行通達

異船一艘浦賀沖進入ノ件

ニ關スル廻狀

正月十四日

九人宛

紅林勘解由殿
金田式部殿
川井攝津守殿

梅林坂御門
紅林勘解由

追啓、式部殿攝津守殿江も御打合之上、廻狀可差出處夜中差掛り義ニ付、一名ニる致廻狀候、以上、

池田播磨守

異國船壹艘、今晝四時頃、浦賀沖江乗入候旨、唯今注進申來候、尤房州布良沖ニ此外異國船漂居候趣をも申出候間、先爲御承知申達候、尤御組之者見廻方等之儀ゝ、猶御達可及候、此段夫々御通達有之候樣存候、

寅正月

紅林廻狀

一同日、曉七半時頃、又々同人より左之通申越候間、直ニ致廻狀候、

追啓廻狀貳觸候

安政元年二月七日

町奉行通達ノ件

以廻狀致啓上候、然ゝ別紙之通、池田播磨守ゟ唯今申越候間、右爲御承知致廻狀候、早々御順達可被成候、以上、

正月十五日

紅林勘解由殿
金田式部殿
川井攝津守殿

紅林勘解由
池田播磨守

町奉行通達

異船野島沖碇泊ノ件

異國船壹艘、相州松輪沖江乘入、尙又浦賀燈明堂ゟ武州金澤沖江乘入、同所野嶋沖江帆を下シ候樣子見請候旨、只今注進申出候間、兼る御内達之通御心得可被成候、尤各樣幷御組共、市中臨時御見廻之儀ゝ明日拙者登　城之上ニる、猶又可及御達候、一先此段夫々江早々御通達有之候樣存候、

正月十四日

坂井右近
松平藤十郎

見廻ノ件

坂井右近等書翰

一同十五日、左之文通到來、

紅林勘解由樣

以手紙致啓上候、然ゝ今朝御廻狀之趣ニ付、今日拙者共登　城池田播磨守江及問合候處、廻り候節ゝ猶又早速相達可申旨被申聞候、尤廻り之儀少々猶豫有之趣ニ及承申候、此段御承知可被下候、右ニ付、跡御同役中江ゝ、右之趣連名ニる致廻狀候、此段可得御意如斯御座候、以上、

正月十五日

一同十六日、廻狀、

以廻狀致啓上候、然ゝ兼る御相談有之候途中ニる支度其外差支候節ゝ、何ゝ之寺院ニるも呑湯之儀差出吳候樣致度旨、今日寺社奉行月番松平豐前守（信義、丹波綾山藩主）江書面差出申候間、左樣御承知、御組々江ゝ被　仰渡可被下候、則達書懸御目申候、御順覽可被下候、

見廻ニツキ町奉行ニ問合ノ件

先手頭廻狀

見廻途中ノ寺院等ニ接待依賴ノ件

先手頭願書

見出し

寺社奉行衆

御先手
本多左京
紅林勘解由
金田式部

寺社奉行ヘ寺院ヘ接待命令ノ件

右同役共此度異國船渡來候ハヽ、市中其外不殘、日々晝夜とも見廻り候樣、御内沙汰も有之候間、彌被　仰付候ハヽ、右拾人組共相廻候間、支度差支候節ハ、何ぞ之寺院成とも立寄呑湯等之儀差出呉候樣致度、兼る御達置被下度奉存候、以上、

石川將監
永井能登守
坂井右近
松平藤十郎
戸川日向守
川井攝津守
内藤甚左衞門

御先手

正月十六日

遠山近江守申立ノ件

一今日川井攝津守登城候處、遠山近江守（左手頭兼帯）ニ面會、同人被申聞候ハヽ、彌見廻り被　仰付候ハヽ、途中ニ付度相用候節ハ、御同役中之内、何レニ成とも不苦呑湯等之義差出可申候間、無遠慮立寄候樣申聞候、尤別段廻狀面ニも書加不申、攝津守ヶ御銘々ニ御通達も可申旨被申候間、是又御承知可被下候、以上、

正月十六日

川井攝津守
松平藤十郎

先手頭一人ヲ日々登城セシム

本多　此方（將監殿到來日向守殿相廻ル）
金田　石川　永井
坂井　戸川

猶以二ヶ條、内藤甚左衞門殿御承知ニ付、致除名候、以上、

一昨日坂井右近拙者共登城、久須美六郎左衞門ニ面會之處、日々壹人宛も出殿ハ有ゝ居候ハヽ、都合も宜趣被相咄、右ニ付被仰合候間、其段申合、今日攝津守、明十七日藤十郎、明後十八日右近とのニ相極、則今日攝津守池田播磨守ニ面會之處、是又前同樣之義ニ成、若急々御達可申義有之候節、至極都合も宜候旨申聞候間、來る十九日ヶ被仰合、御出　殿御座候御方可然奉存候間、宜被仰合可被下候、此段爲御承知書加申候、乍御世話御順達可被下候、以上、

正月十六日

川井攝津守

本多　此方　金田
石川　永井　戸川
内藤

猶以右近殿こと御承知こ付、致除名候、以上、

丑年十二月分、
紀伊守殿御渡、
十二月晦日、

和泉守
伊賀守

海岸防禦筋之御用向、近來多端こ相成候こ付、伊勢守・備前守申合取扱候樣被　仰出之、

一寅年正月十二日、和泉守殿御渡、

本庄安藝守

海岸防禦筋之御用向、近來多端こ相成候こ付、本多越中守・遠藤但馬守申合取扱候樣相達候、

松平藤十郎廻狀
臨時見廻當番非番ノ件

海岸防禦筋之御用向、近來多端こ相成候こ付、本庄安藝守儀向後本多越中守・遠藤但馬守申合取扱候樣被　仰出候こ付、月番順ヲ立取扱候間、向々諸伺諸屆等其心得こる差出可申候、尤當月ゟ本多越中守、來月ゟ遠藤但馬守、三月ゟ本庄安藝守相心得候事、

右之趣相達可然向ゟ可被相達候事、

異國船萬一浦賀表ゟ渡來爰有之候節ゟ、人心動搖不致ゟ滯船中ゟ諸家調練幷大森角筈等、都る大筒稽古ゟ見合候樣可致候、此段向々ゟ可被達置候事、

正　月

一正月十四日、中御門當番松平藤十郎廻狀面之內、

浦賀表ゟ異國船渡來候ハヽ、兼る心得被在候十人衆卽時こ廻り被　仰付候節、右拾人衆之內八ヶ所當番日こ候ハヽ、其日之非番桁番附順こ、右俄助割出、早々當番代り合爲致可申候間、當番方御組々ゟ、兼る被仰渡置可被成候、

但、夜中こ相成候節ゟ、翌朝六時交代こる廻り之組退番可爲致候、尤不殘當番ゟ申儀も無之候間、右之通こる差支有之間敷候、

右之趣書加候樣、議定掛月番戸塚豐後守（先手鐵砲頭）こ申聞候、

一正月十五日、

和泉守殿御渡ー、

此度亞墨利加船浦賀表江渡來致ー候得共、穩之趣ニも有之候間、諸向動搖不致火之元等別る入念候樣、向々江可被達候事、

一同日、

但馬守殿御渡ー、

去夏浦賀表江亞墨利加船渡來、以後領分知行江過分之人馬觸當置候面々も有之哉ニ相聞候、畢竟防禦之守備等之ゝ為、用意申付候儀ニ可有之候得共、左候ゑと渡來之節、一時ニ在方人少ニ相成、取締不宜、自然惡黨共立廻り村々難儀致ー候樣可相成候間、勘辨致ー村方不相應之人馬呼寄候義不致、右躰之節と村方取締之儀、別る嚴重ニ可被申付候、

右之通、關八州領分知行有之面々江、可被相觸候、

一正月十八日、

越中守御渡ー、

異國船近海江渡來之節、近國領分知行所之面々、在町取締之儀、銘々心得も可有之候得共、萬一惡黨共立廻り可申も難計候間、捕方等別る嚴重ニ可被申付置候、若捕押兼

紅林本多連署廻狀

臨時見廻一人日々出殿ノ件

候儀も有之候ハヽ、切捨又ゑ打殺候るも不苦候、

右之通御料私領寺社領とも、近國之分不洩樣可被相觸候、

正　月

浦賀表江渡來之異國船、內海江乘入候節、臨時御警衛出張致ー候向ゑ、去丑年六月中相達候通、火事具相用武器用意可致候、且又萬一異變ニも及候場合ニ至り、諸手為差圖老中・若年寄之內、致出馬候節と、小具足陣羽織着用之筈ニ候、諸向之儀と銘々存寄次第勝手之品相用可申候、

但、違變之場合ニ無之候とも、時宜ニ寄老中・若年寄之內、見廻り等ニ相越候儀も可有之候、其節ハ火事具相用可申候、諸向之義と是又銘々存寄次第、火事具ニるも野服ニるも勝手次第之品相用可申候、

右之趣、為心得向々江可被達置候事、

一正月十七日、左之廻狀本多左京方ニる差出ス、

以廻狀致啓上候、然と一昨十五日坂井右近殿川井攝津守殿登　城、久須美六郎左衞門江面會之處、臨時廻り拾人之者、日々壹人ツヽ御殿江罷出居候ハヽ、都合宜旨被相咄候、右ニ付被居合候間、其段右近殿攝津守殿被申合、十六日攝津守殿十七日藤十郎殿

十八日右近殿と相極メ被申候、且攝津守殿ゟ池田播磨守江も咄合被致候處、前同樣罷出居候方、急々之達有之候節都合宜旨被申聞候間、依之十九日ゟ之日割一巡相極メ尤御退出迄御詰可被成候、此段爲御承知廻狀致貳觸候、早々御順達、留之從御方勘解由方江御返可被成候、以上、

正月十七日

紅林勘解由
本多左京

登城當番日割

覺

正月十六日　川井攝津守
十七日　松平藤十郎
十八日　坂井右近
十九日　内藤甚左衞門
廿日　戸川日向守
廿一日　永井能登守
廿二日　紅林勘解由
廿三日　本多左京
廿四日　御成ニ付不詰
廿五日　石川將監
廿六日　金田式部
廿七日　内藤甚左衞門
廿八日　松平藤十郎
廿九日　坂井右近
二月朔日　川井攝津守

一正月十二日、知行所貳ヶ國江下知狀左之通、

下知狀之事

浦賀表江異國船渡來候ハヽ、江戸市中其外御取締とゝて嚴重御見廻り被仰渡候ニ付、上總國三ヶ村ニる夫人三人被仰付候間、來ル十七日迄ニ無相違出府可有之ゑの也、

知行所ニ人夫差出ヲ命ズ

寅正月十二日　地頭
用　所印

八田村名主　左兵衞へ

同文言ニ付、貳ヶ村ニる夫人四人、

配松村名主　孫兵衛へ

下總國配松村ニる四人出府
上總國作田八田ニる三人出府

一正月十六日

一正月十七日

都合七人出府致候、

一正月九日、平川口御門當番之節、左之通以書付申渡ス、

月番　與力ヘ

高村繁右衛門

先手頭申渡

其方儀老年ニも候間、此度臨時見廻り被　仰付候ハヽ、悴角次郎儀爲代勤可差出候、

正　月

與力高村繁右衛門悴名代ノ件

月番　與力ヘ

高村繁右衛門
市原次之助
田中春次郎
福原龜之助

見廻心得ノ件

此度臨時見廻り被　仰付候ハヽ、其方共申合、組屋敷留守宅火之元其外共、厚心付繁々見廻り可申事、

正　月

頭附同心
石橋錄兵衛
内藤博太郎
長谷川善之助
服部岩之助

見廻場所

安政元年二月七日

塚田直平
高村角次郎

都合六人

出場限り

一芝
札之辻松平肥後守・松平陸奥守下屋敷、品川海晏寺邊迄、

一麻布
櫻田町三軒家阿部播磨守屋敷限り、

一四ツ谷
大番町大木戸限り、

一市ヶ谷
松平出雲守元屋敷限り、

一牛込
榎町早稻田限り、

一小日向
目白下新町、目白不動、音羽町護國寺限り、

一小石川
御殿跡後ロ限り、

一本郷
駒込嶋田升之助屋敷限り、當時田沼玄蕃頭屋敷、

一下谷
金杉限り、

一谷中
三崎限り、

一淺草
觀音堂邊、今戸邊限り、

一巣鴨
大原町限り、

一大久保
安藤祐之丞屋敷限り、

一青山
松平左京大夫屋敷限り、

安政元年二月七日

紅林本多連署廻狀
見廻場所ノ件

安政元年二月七日

一權田原
紀伊殿屋敷限り、
甲府元屋敷限り、

一八丁堀
靈岸嶋木挽町尾張殿藏屋敷限り、

一深　川
八幡限り、

一本　所
龜戸天神橋限り、

一北本所
水戸殿下屋敷、源兵衞堀邊限り、

以上、

一正月廿一日、

以廻狀致啓上候、然ゝ先達る御相談相濟候廻り場桁之内、洩候ヶ所も有之候ニ付、朱書認入爲御承知致廻狀候、御存寄も無御座候ハヽ、御組々ゟ可被仰渡ゝ存候、御承知之有無御下附こる御順達、留之從御方寄ゟ御返可被成候、以上、

紅林勘解由
本多左京

海防掛目付
通達
寄場出張者
配賦ノ件

正月廿一日

八人宛

但ヽ、何ゝも存寄無之旨、下附こる廻狀戻ル、朱書ハ廻候桁之内ゟ認入置、

一同日、

一異國船渡來非常之節、各方幷組支配與力同心家來共ニ至迄、當番之者相除、寄場ゟ相詰候向ゝ、三千石以上持高幷御役高とも、晝夜四度之御扶持方ニる被下候ニ付、頭支配ニおゐて焚出シ致、配賦致ヽ可申候、三千石以下之分ハ、組支配幷家來至迄(ニ脫カ)、晝夜四度ヅヽ、御賦被下候積、且乘馬秣等之儀ゝ、二千石以下之分ハ、是又兵粮同樣、於場所御渡有之候ニ付ゟ、組人數幷家來下々迄之惣數、貳千石以下乘馬員數等取調、拙者共迄早々御申聞可有之候、尤御軍役ニ相泥ミ無、常々雜人雇人等召連候儀可成丈相省キ、御實備之處致勘辨、御申聞可有之候、

但、屯所相立、翌日夕刻ゟ御扶持方御賦被下候ニ付、夫迄之兵粮等ハ銘々用意致候樣可被致候、且御扶持方御賦請取方幷場所等之儀ハ、猶又御申聞可有之候、

右之趣伊勢守殿被仰渡候ニ付、申達候、以上、

安政元年二月七日

正月十九日

中御門
當御番中

永井岩之丞
堀織部
大久保市郎兵衛
井戸石見守

三千石以下之分
頭壹人ニ付
用人壹人
供壹人
侍貳人
馬口貳人
馬印壹人
鎗壹人
箱壹人

草り取壹人
雨具物持三人
玉矢之内
御道具持貳人
御紋付御挑灯持壹人
自分挑灯持四人
三千石以上之分增
侍壹人
徒貳人
箱壹人
押壹人
物持五人

「答（朱書）」
大組
與力五人

右之通晝夜詰番四人、寄場ゟ相詰申候、

但、淺香傳四郎（先手鐵炮頭）・小栗右膳組（先手鐵炮頭）ゟ大組ニ有之候間、組人數相違仕候、外ゟ小組ニ付人數書面之通御座候、

寅　正　月

一同日、

和泉守殿御渡ー、

異國船渡來之節、萬一異變ニも可及樣子候ハヽ、於火消屋敷早盤木打候間、万石以上

供　十　人
同　心　三十人
御道具附挑灯持貳人
（朱書）「小組」
與　力　三　人
供　六　人
同　心　貳十人
御道具挑灯持貳人

御先手

櫓有之向ニゐも同樣、盤木を取、場末迄相繼候樣可致候、右を承り候ハヽ、非常之場合ゟ相心得、火之元等取締致ー置、詰場々々ゟ可罷出候、

一右之通相成候ニ付ゐゟ、異國船渡來中出火之節ゟ、諸向共盤木不相用、是迄盤木相用候向ゟ、太鼓ニゐも半鐘ニゐも相用可申候、

右之通可被相觸候、

正　月

御同人御渡ー、

異國船渡來ニ付、海岸屋敷有之面々ゟ、武器等相廻ー置、萬一非常之節混雜無之樣可致候、尤成丈不事立樣穩便ニ取計可申候、

右之趣可被相達候、

正　月

一同廿三日、

和泉守殿御渡ー、

異國船渡來之節、萬一異變之儀ニ可及場合ニ至り、早盤木打候節ゟ、早速銘々持場ゟ出張可致ゟ勿論ニ候得共、下々等麁忽ニ動搖致ー、無益之雜人等屋敷内外立騷、及混

雜候樣ニるた、不慮之過失も可有之、以之外之儀候間、兼る嚴重ニ申付置、出張等之節、不法之義無之樣、向々江可被達候事、

一同日、急廻狀、

和泉守殿御渡ー、

異國船之樣子ニ寄、老中・若年寄登　城有之候ハヽ、御城當番之面々も同役中江申通、登　城之上、異國船穩ニる盤木之合圖こと不至候得共、全く御警衛迄ニ諸番頭諸物頭御番方等、寄場々江可罷出旨、何茂も被相伺候ハヽ、可及差圖候間、其趣向々江被相達候節、早々通達行屆候樣ニ手筈兼る可申合置旨、向々江可被達候事、

正　月

一異國船渡來之節、盤木合圖ニる出張幷爲御警衛、寄場屯所等江相詰候節ハ、御門々鐵炮其外武器出入之儀、右員數書付、万石以上之面々ハ家來印紙差出、万石以上之分ハ自分印紙書付、御門々江相達通行可被致候、尤後日其段最寄御目付江相屆候樣可被致候、

一御城内御警衛之面々ニハ、鐵炮武器類下馬所江相殘置、當番御目付も相達次第、前文同樣之振合ヲ以、操入候樣可被致候、

右之通可被相觸候、

正　月

紅林本多連署廻狀
町奉行トノ交渉ノ件

一同廿四日、左之廻狀、本多左京方ニる貳觸廻狀差出ス、

以廻狀致啓上候、然ハ昨廿三日左京儀　御殿江罷出、池田播磨守江、見廻之節番屋ニる呑湯等之儀無差支差出候樣達書同人江相達申候、且又見廻り不被　仰付候以前、早盤木打候節之心得方問合申候處、別紙之通相心得候て宜旨、被申聞候間、御一同御承知可被成候、右得御意廻狀御順達、留之從御方勘解由方江御返却可被成候、以上、

正月廿四日

紅林勘解由
本多左京

先手頭願書

見出ー小札

池田播磨守殿

御先手

本多左京
紅林勘解由

番屋へ接待命令ノ件

右同役共、此度異國船渡來候ハヽ、市中其外不殘、晝夜とも見廻り可被　仰付、御内沙汰も有之候間、彌被　仰付候得ハ、右拾人組共相廻り候間、支度其外差支候節ハ、何レ之番屋こゝるも最寄次第、呑湯等之儀差出呉候樣致一度、兼御達置可被下候、以上、

正　月

金田式部
石川將監
永井能登守
坂井右近
松平藤十郎
戸川日向守
川井攝津守
内藤甚左衞門

御　先　手

一見廻り不被　仰付候以前、早盤木打候節ハ

御殿江可罷出候事、

一見廻之節番屋こゝる呑湯爲差出候るも、挨拶差出候ニ不及候事、

遠山近江守問合書著服ノ件

右之通ニ候、

但、早盤木打候節、

御殿江相詰候ニ付るハ、組之者と頭々宅江集居候樣、可致ら存候、

一同廿四日、昨廿三日御書付之趣、頭組共着服之儀、中御門當番遠山近江守ゟ、當番御目付中江左之通問合被置候、答下ヶ札こゝる申聞候、

一同廿五日、答下ヶ札左之通、

異國船之樣子ニ寄、御老若方御登　城有之候ハヽ、拙者共幷組之者、平服こゝる火事具致用意相詰可申哉、此段御問合申候、以上、

正月廿四日

當　番

御目付中

中御門當番

遠山近江守

遠山等連署廻狀臨時廻ニヨ

答下ヶ札

書面之通こゝる候

下ヶ札

一同日、宅廻狀、

以廻狀致啓上候、然ハ當番詰番代り合、三組不足ニ相成候ニ付、伺可申ら伺書案ヲ以

リ警備人數不足ニ付伺書提出ノ件

伺書案

安政元年二月七日

及御相談候、思召之有無之外ニ御心附之廉も御座候ハヽ、無御遠慮可被仰聞候、廻狀早々刻限付ヲ以御順達、留之從御方最寄之内江御返可被成候、以上、

遠山近江守
野間忠五郎
戸塚豐後守

正月廿五日

此度異國船渡來ニ付、御先手拾人臨時廻り之御沙汰ニ付、右拾人ハ廻り方被　仰付候節ハ、御番除ニも相成可申哉、左候得ハ跡御先手加役壹組除キ、貳拾三組ニ御座候ハ、當時

御廟番共御番所八ヶ所ニ付、當番八組非常之節西丸裏御門詰、御鐵炮壹組、同中腰掛ヶ詰、御鐵炮壹組、和田倉詰、弓鐵組合貳組、右拾貳組何レ茂詰切罷在、外ニ俄助壹組、都合十三組、日々番桁相立、相勤罷在候處、十組臨時廻りニ減候ハヽ、惣組數二十三組ニハ、當番十三組之代り合ニて、十組ニハヽ三組不足仕、何分代合出來不申差支候間、種々勘辨仕候處、俄助壹組相止メ可申候、夫ニハヽ二組不足仕候間、和田倉詰・弓鐵二組　御供之心得ニハヽ相詰罷在候間、右二組之詰番　御免ニ茂相成候得ハ、都合三組出來仕候得共、非常之御時節ハ、右　御免之儀も如何ニも奉恐入候儀ニ付、臨時廻十組

紅林勘解由答書

之内ハ、貳組當番詰番之方江、隔日ニ替々出勤仕候樣被　仰付候得ハ、御差支無御座、可成代合も出來仕難有奉存候、依之同役一同相談仕、此段奉伺候、以上、

正　月

御先手
議定掛
戸塚豐後守
野間忠五郎
遠山近江守

一同廿六日、答書取調月番戸塚豐後守江、左之通相達ス、

（朱書）答書

御答書

紅林勘解由

昨日御廻狀ニハヽ御相談之趣致承知候、拾人臨時見廻り被　仰付候節ハ、御番除ニも可相成哉、左候得ハ殘り當番方御人少ニ付、廻り方拾人之内ハ貳組當番詰番之方江、隔日ニ替々出勤候樣、御伺書御差出之趣ニハ候得共、拾人組共ハ彌見廻り被　仰付候得

安政元年二月七日

た、市中不殘其外場末迄日々晝夜相廻り候儀ニ付、一日為非番ち申廉一切無之、既ニ見廻り不被　仰付以前、若早盤木打候ば、御老若方不時御登城有之候節ち、拙者共拾人御殿江相詰、組之者共ち俄廻り之心得ニる、頭々宅江集置候程之儀ニ付、當番詰番之方江ち出勤難相成儀ち存候、併此節柄御伺之上御差圖有之候得ち、何ち共相勤可申心得ニ御座候、依之及御答候、

正月廿六日

紅林勘解由　戸塚豐後守様
池田播磨守　野間忠五郎様
遠山近江守様

一同廿八日、夜六時過町奉行池田播磨守ち左之通申越候ニ付、廻狀幷夫々江文通差出候、

紅林勘解由様　池田播磨守

別紙御達書、外壹封為持差進申候、以上、

見廻開始ノ件

町奉行通達

正月廿八日

勘解由様　播磨守
右近様
藤十郎様

先刻申上置候御廻り方之儀、明朝ち申上候得共、猶伺之上、今晩ち相成候間、左様御承知可被下候、以上、

正月廿八日

紅林勘解由殿　池田播磨守
金田式部殿
川井攝津守殿

見廻心得ノ件

先刻委細及御相談候各様市中臨時御見廻り之儀、彌今廿八日夜ち拾組之内晝夜持切、日々四組ッ、順番ニ御廻可被成候、尤異國船内海江乘入候得共、碇泊致ー居、市中一躰ニ人氣穩ニ有之候間、異船渡來之廉ニる御廻り之御心得ニた無之、全火之元且怪敷

もの御召捕之御心得、御組等ゟも被御申含、末々之もの等權威ヶ間敷儀無之様御申付可有之候、尤追る拾組共廻り被　仰付候迄ハ、御府内場廣之儀ニ付、四組之内重々海岸近町々御廻り之積御申合可然候、右ハ伊勢守殿ゟ伺之上及御達候、早々御同役衆ゟ御達可有之候、

正月廿八日

紅林勘解由

御同役中

紅林勘解由急廻狀

夜四時前出ス

追啓、廻狀致貳觸候、且將監殿ニハ御承知ニ付、致除名候、以急廻狀致啓上候、然ハ只今池田播磨守ゟ、別紙之通申越候處、差掛り候義ニ付、見廻り場所幷順番、是又別紙之通割出相廻申候、其旨御心得三ヶ所之内被仰合、御見廻り可被成候、尤四組宛ニハ候得共、當番其外差支こる、日々順番難相立候間、明廿九日ゟ御番除之儀、議定掛戸塚豐後守・中之御門平塚善次郎（先手鐵炮頭）ゟ申達候、廻狀早々御順達、留り之從御方御返可被成候、以上、

紅林勘解由急廻狀

見廻場所及順番ノ件

正月廿八日

八人宛　二觸

紅林勘解由

達書ハ前ニ有之、略之、

見廻り場

麻布　芝邊　品川　貳組

築地　濱町邊　靈岸嶋　壹組

深川　南本所邊　壹組

以上

見廻り順

紅林勘解由

正月廿八日夕ゟ　石川將監
同廿九日夕迄　永井能登守
　　内藤甚左衞門
　　本多左京
　　金田式部
　　松平藤十郎
正月廿九日夕ゟ　川井攝津守
二月朔日夕迄　石川將監
　　永井能登守
二月朔日夕ゟ　坂井右近
同　二日夕迄　戸川日向守
　　本多左京
　　紅林勘解由
二月二日夕ゟ　松平藤十郎
同　三日夕迄　内藤甚左衞門

本多紅林連署書翰

見廻開始ニツキ御番除外ノ件

見廻場所ニ

猶以、今夜中ゟ明日之儀ゟ差掛候儀ニ付、將監幷拙者兩人ニる、麻布芝品川邊相廻可申候、能登守殿本所深川邊、甚左衞門殿築地濱町靈岸嶋邊、御見廻可被成ゟ存候、以上、

戸塚豐後守様　　本多左京
　　紅林勘解由

以手紙致啓上候、然ゟ唯今池田播磨守ゟ別紙之通申越候間、寫壹通差進申候、右ニ付、今晩ゟ相廻候處、日々四組宛ニゟ候得共、順番難相立差支候間、明廿九日ゟ御番除ニ相成候様、御取計可被下候、尤中御門當番平塚善次郎ゟも申遣候、右可得御意如期御座候、以上、

正月廿八日

承知之旨、返書來ル、

一中御門當番平塚善次郎ゟ之文通、同様之廉ニ付略之、

一同日、書過出ス、

以廻狀致啓上候、然ゟ今日拙者共
御殿ゟ罷出候處、池田播磨守申聞候ゟ、此節異國船渡來之處、市中至る穩ニゟ候得共、

ツキ町奉行申出ノ件

昨今近海江乗入候趣ニ付、海岸附幷山ノ手二ヶ所、市中爲取締日々晝夜貳組ッヽも相廻り候方可然、彌見廻之義と同人ゟ早速通達可致旨、是又申聞候間、其節被仰合、御廻り可被成ゟ存候、尤今日御同役中有合ニる致評儀、廻り場所幷兩人ッヽ、組合相立、非番桁ゟ割出、別紙掛御目申候、且彌拾人廻りニ相成候得ゟ、御番除ニも可相成候得共、夫迄之内ゟ非番ゟ相勤候積、先一順取極申候、右ニ付、廻り場内ゟ勿論、其外ニるも聊かさつヶ間敷儀等無之、穩便ニ相廻候樣、且御組々手札之儀も、廻り場内ニ無之番屋江ゟ差出不申候方可然哉之趣ニ付、兼る御組々江可被仰渡ゟ存候、廻狀早々御順達、留之從御方左京方江御返可被成候、以上、

紅林勘解由
本多左京

見廻順番ノ件

正月廿八日
正月廿九日　石川將監　永井能登守
二月朔日　戸川日向守　川井攝津守
同　二日　紅林勘解由

見廻心得ノ件

同　三日　金田式部　坂井右近　内藤甚左衞門
同　四日　本多左京　松平藤十郎
同　五日　永井能登守　川井攝津守
同　六日　紅林勘解由　金田式部
同　七日　坂井右近　戸川日向守
同　八日　本多左京　松平藤十郎
同　九日　石川將監　内藤甚左衞門

廻り場所

赤坂　築地
青山　濱町
麻布　靈岸嶋
芝　本所　南方
品川　深川

猶以、藤十郎殿甚左衞門殿ニて、廻り日之内
御廟番有之候得共、前以操替之儀拙者共取扱申候間、左様御承知可被成候、且右近殿
藤十郎殿日向守殿甚左衞門殿ニて御承知ニ付、致除名候、

一同廿九日、

以廻狀致啓上候、然ハ此度臨時見廻場所之儀、猶又相談之上、二月朔日ハ之日割、別紙
之通相改候間、左様御承知可被成候、廻狀早々御順達、留從御方勘解由方へ御返可被
成候、以上、

正月廿九日

紅林勘解由
本多左京

見廻順番改正ノ件

八人宛

見廻り場所

貳組

麻布
芝　邊
品川

貳組

築地
濱町
靈岸嶋　邊
深川
本所

二月朔日夕刻ハ　坂井右近
同　二日夕刻迄　芝　永井能登守
築地　石川將監
戸川日向守
松平藤十郎

二月二日夕刻ゟ　芝　内藤甚左衞門
同　三日夕刻迄　築地　本多左京
紅林勘解由
戸川日向守
川井攝津守
坂井右近
金田式部

二月三日夕刻ゟ　芝
同　四日夕刻迄　築地

若年寄達
臨時見廻ニ付扶持給與ノ件

一同日、
本多越中守殿御渡候御書付、

御先手
石川將監
永井能登守
坂井右近
本多左京
紅林勘解由

四拾人扶持ッ、

拾人扶持ッ、　右之面々組　金田式部
松平藤十郎
戸川日向守
川井攝津守
内藤甚左衞門

三人扶持ッ、　同　與力
浦賀表ゟ異國船渡來ニ付、組々之者共召連、晝夜共市中其外見廻候内、右之通御扶持方被下候、御勘定奉行可被談候、

一同日、中御門廻狀面之内、
一此度廻り拾人衆桁拔ニ相成候ニ付、御番桁來月二日戸塚豐後守坂下御門當番ゟ相改候間、則御番桁相廻申候、御銘々御引取可被成候、尤右桁之内定式俄介桁と相止、若引等之節も其御門々明ケ之御方御出勤可被成候、且前々引込罷在候御方と、御番前手明

同　心

石川將監書翰　扶持給與ノ件

キ幷御番明ケ方割出可申候、尤組々類燒其外ニる壹組助相立候樣ニ申越候ハヽ、前同樣其門々明ケ番組ニる相心得可申候、

一御廟番所割出方之儀ハ、御番前手明キ幷御番明ケ名順ニ御心得可被成候、此段書加候樣議定掛月番戸塚豐後守ゟ被申越候、

一二月二日、

以廻狀致啓上候、然ハ一昨廿九日、當御番御目付中ゟ本多越中守殿御渡候御書付差越候旨、中御門助淺香傳四郎ゟ差越候處、右ハ御同樣組共市中其外見廻り候內、御扶持方被下候義ニ付、右寫相添、御勘定奉行石河土佐守（政平）・松平河內守（近直）ゟ相達候處、落手承知之旨返書差越候間、緘添懸御目申候、尤御書付之儀ハ中御門廻狀ニる御承知之義ハ存候間、別段相廻不申候、乍御世話廻狀御順達留之從御方御返可被下候、以上、

二月二日　　石川將監

九人宛

本多左京樣
紅林勘解由樣
金田式部樣
石川將監樣
永井能登守樣
坂井右近樣
松平藤十郎樣
戸川日向守樣
川井攝津守樣
內藤甚左衞門樣

勘定奉行書翰　扶持給與ノ件

御手紙致拜見候、然ハ此度浦賀表ゟ異國船渡來ニ付、貴樣方御組之者御召連、日々晝夜市中其外御見廻之儀被仰渡、右御見廻之內、御別紙之通御扶持方被下候旨、御紙面之趣落手致承知候、右御報如斯御座候、以上、

二月朔日　　石河土佐守
松平河內守

猶々御書付寫致落手候、以上、

一同日、

以廻狀致啓上候、然ゝ此度臨時見廻り場所、來ル四日ゟ之日割取調、別紙相廻申候、早々御順達、留之從御方左京方へ御返―可被成候、以上、

紅林勘解由
本多左京

二月二日

見廻り場所幷日割

見廻場所幷日割

芝（石川將監 永井能登守）
二月四日ゟ

筑地（戸川日向守 松平藤十郎）
同　五日ゟ迄

芝（内藤甚左衞門 本多左京）
同　五日ゟ

筑地（紅林勘解由 川井攝津守）
同　六日ゟ迄

芝（金田式部 石川將監）
同　六日ゟ

筑地（永井能登守 戸川日向守）
同　七日ゟ迄

芝（松平藤十郎 内藤甚左衞門）
同　七日ゟ

筑地（本多左京 紅林勘解由）
同　八日ゟ迄

芝（川井攝津守 坂井右近）
同　八日ゟ

筑地（金田式部 石川將監）
同　九日ゟ迄

芝（永井能登守 戸川日向守）
同　九日ゟ

筑地（松平藤十郎 内藤甚左衞門）
同　十日ゟ迄

以　上

一同日、

以廻狀致啓上候、然ハ今日拙者儀
御殿江罷出候處、池田播磨守ゟ別紙之趣申聞候間、爲御承知相廻申候、御組々江も可
被仰渡ら存候、廻狀御順達、留之從御方御返可被成候、以上、

川井攝津守

二月二日

九人宛

町奉行口達
異人亂暴ノ際取扱ノ件

品川筋廻之節、若萬一異人上陸致亂妨、婦人召連可參哉之儀も有之候るも、決る異人
ニハ拂ひ不申、婦人ハいさハり不相渡候樣致一可申候、尤右樣有之候ハヽ、町奉行組
之者見廻り居候間、夫江申候ハヽ、播磨守江早速通達致一可申旨、同人申聞候、

二月二日

一同三日、

以廻狀致啓上候、然ハ拙者儀今日
御殿江罷出候處、久須美六郎左衛門被申聞候ハ、臨時廻り相勤候内ハ、中之間詰幷中
之口ゟ出入之儀申上候方可然旨申聞候間、則相伺候處、可爲先格之通旨、御書取ヲ以

被仰渡候間、別紙寫縅添相廻申候、廻狀御順達、留之御方ゟ勘解由方へ御返可被成候、
以上、

二月三日

紅林勘解由
本多左京

但馬守殿
伺書

御先手

本多左京
紅林勘解由
金田式部
石川將監
永井能登守
坂井右近
松平藤十郎
戸川日向守

私共儀市中其外臨時廻り被　仰付候ニ付、先格之通相勤候内、中之間江相詰、且中之口ゟ出入可仕哉奉伺候、以上、

寅二月三日

川井攝津守
内藤甚左衛門

御先手

覺

可爲先格之通候事、

一同日夜、左之通申來候間、明日登　城之儀、左京方江も及文通候、

以手紙致啓上候、然ゝ少々御談申度儀御座候間、御廻り拾人之内こゝ、御筆上之御方御壹兩人、明四日御登　城御座候様致度、右可得御意如斯御座候、以上、

二月三日

猶以、明日拙者評定所江罷越、夫ゟ登　城致ー候、爲念此段も得御意候、以上、

一同四日、

若年寄指令

町奉行書翰

明日登城ノ件

伊賀守殿御渡候御書付寫差遣候、可被得其意候、以上、

二月三日

當番

御目付中

亞墨利加船此節近海江碇泊致ー候處、當地ゟ追々見物船差出、異船江近寄候儀も有之、陸地ゟも見物人も多分之趣ニ相聞候、異船渡來中ハ假令外用向こゝ最寄迄相越候儀有之候共、海陸共都ゝ見物ヶ間敷儀も無用ニ候間、其段向々江早々可被相達候、尤御備場御用相心得候面々等ゟ、見留船差出候儀も有之候共、異船江ゝ乘寄不申、浦賀奉行組番船江引合候様取計可申旨、是又可被相達候、

二　月

一同日、昨日池田播磨守ゟ達候通、本多左京・自分登　城、播磨守江面會、同人談之趣、左之通御觸廻狀差出ス、

追啓廻狀致貳觸候

以廻狀致啓上候、然ゝ昨夜池田播磨守ゟ廻り方拾人之内、筆頭壹兩人、今四日登　城候様申越候ニ付、則今日拙者共登　城之上致面會候處、此度市中臨時見廻り、最初達有之候通、異國船渡來ニゝ候得共、市中至ゝ穩ニ候間、全火之元幷怪敷ゝの召捕之心

池田頼方ト面談ス

紅林本多連署廻狀

見廻心得ニ

關スル町奉行ノ注意

得こる相廻可申趣、御一統御承知こと候得共、拾人御組共こるた如何こも多人數之事故、中こた心得方不行屆向も可有之哉こ付、猶又改る談之由、右た市中見廻之節、如何こ爰穩便こ見廻り、諸番屋こるも見廻り中た安心致ー居候樣取計可申、其上諸番屋ゟ相詰候人數等之儀も、萬一不足致ー居候儀も難計候得共、右人數調之儀も、町奉行組之ものこる、日々取調候事故、御先手方見廻り之組々こるた、一切構不申方可然、一躰市中人氣も穩之處、御先手方廻りこ相成候るか、諸番屋其外こる難澁こ相成候樣と相心得候るも、以之外之事、寂前伊勢守殿御差圖之廉こた致相違候間、吳々爰御一統御組幷下供等こ至迄、幾重こも御威光ヲ以、かさつヶ間敷儀無之樣、精々心掛相廻り吳樣申聞候、萬一此上諸組幷下々家來共之內、心得違之者有之候る、聊かさつヶ間敷儀も有之候節も、無據其趣申上候、左候得も御頭組共御名前も出、御迷惑之廉爰出來可申も難計候間、兼る相心得居可申旨、是又申聞候、依之御一統厚御心得、御組々幷供方下々こ至迄不洩樣嚴敷可被仰渡も存候、右爲御承知致廻狀候、早々御順達、留之從御方左京方へ御返ー可被成候、以上、

二月四日

紅林勘解由
本多左京

紅林等申渡

見廻心得ノ件

八人宛

一右こ付、此方組一同ゟ左之通申渡候、

月番　與力ゟ

廻り方　與力
同心　一同ゟ

申渡

昨四日廻り方拾人之內筆上之者一兩人、登　城候樣池田播磨守ゟ達こ付、本多左京・紅林勘解由登　城候處、播磨守申聞候も、此度市中廻り之儀最初達之通、異國船渡來こと候得共、市中至る穩こ候間、全火之元幷怪敷もの召捕之心得こる、相廻可申趣ハ兼心得被居候得共、拾人組共こるた如何こも多人數之事故、中こと心得方不行屆向も可有之哉こ付、改る達之由、右た市中廻り之節如何こも穩便こ相廻り、諸番屋こるも見廻り中た安心致ー居候樣取計可申、其上諸番屋へ相詰候人數之儀も、萬一不足致ー

居義も可有之候得共、右人數調之儀ハ、町奉行組之ものこゝる日々取調方致一候間、御先手方廻り之者こゝるハ、一切構不申方可然哉之趣、且市中人氣も穩候處、御先手方廻りこ相成候ゝるハ、諸番屋其外こゝる難澁こ相成候樣と相心得候ゝるハ、以之外之事こ候、最前伊勢守殿御差圖之廉々ハ致相違候間、御威光ヲ以かさつヶ間敷義無之樣相心得可申、萬一此上諸組幷家來下々迄心得違之ものの有之候節ハ、無據其趣御支配方へ申上候、左候得ハ頭組共名前も出迷惑之廉こも可及候間、兼ゝる相心得居候樣播磨守申聞候付、此段一同江申渡候、右こ付廻り先こゝる辨當相用候節も、市中茶屋等江ハ立寄不申、酒氣等ハ猶更一切無用こ候間、厚心掛聊かさつヶ間敷義無之樣、精々相心得嚴重こ相廻可申候、依之申渡候、

二月五日

一同五日、中御門廻狀面之內、

異國船渡來非常之節、三千石以上持高幷御役高共、一晝夜四度分ッ、御扶持方こゝる日々被下、頭支配こおゝゝ焚出一配賦いさ一候樣、先達ゝる御達申置候處、場所高三千石以下之分ハ持高三千石以上こゝるも、都ゝる御賦こゝる被下候積り、伊賀守殿被仰渡候、依之申達候、以上、

紅林本多連署廻狀

見廻一人中之間詰ノ件

二月四日

岩瀨修理
永井岩之丞
堀織部

一同六日、

以廻狀致啓上候、然ハ中之間江相詰候儀、廻り拾人之內ハ壹人ッ、相詰可申哉之段相伺候方宜旨、池田播磨守・久須美六郎左衞門內々申聞候間、相伺候處、遠藤但馬守殿以御書取伺之通被仰渡候、依之詰番日割書付共緘添御目こ掛申候、且又中之口ハ御賄頭之部屋江御出可被成候、尤御供方こ刀爲御持置、休息所之儀ハ御鷹匠之部屋こ御座候得共、六郎左衞門ハ斷不相濟內ハ、中之口こ爲御待置候樣、同人申聞候、此段爲御承知得御意候、廻狀早々御順達、留之御方ハ勘解由方江御返可被成候、以上、

二月五日

紅林勘解由
本多左京

八人宛

安政元年二月七日

但馬守殿

伺書

伺之通、御書取ヲ以被仰渡、
承知仕候、
二月七日　本多左京

承付

御先手

本多左京
紅林勘解由
金田式部
石川將監
永井能登守
坂井右近
松平藤十郎
戸川日向守
川井攝津守
内藤甚左衛門

私共儀今度海岸筋臨時廻り被　仰付候ニ付、勤中先格之通中之間ゟ相詰、中之口出入伺相濟候間、拾人之内四組ッヽ見廻り候内、申合壹人宛罷出候樣可仕哉、奉伺候、以上、

二月四日

御先手

覺

可爲伺之通候事、

中之間ゟ廻り拾人之内ゟ、日々壹人宛相詰候、

詰番順

二月七日　紅林勘解由
八日　永井能登守
九日　本多左京
十日　坂井右近
十一日　戸川日向守

一同日、

安政元年二月七日

戸川日向守廻状

町奉行達書辨當札等ノ件

町奉行掛合書

見廻先ニテ辨當焚出ノ件

猶以差急候儀ニ候得共、辨當札壹枚ニ付、致壹觸候、

以廻狀致啓上候、然ル池田播磨守ゟ之達書幷帳面壹冊辨當札壹枚、久須美六郎左衞門ゟ被相達候由、同人ゟ達書相添差越候間、本紙相廻申候、凡人數御取調早々拙者方ゟ可被遣ゟ存候、廻狀御順達、留之從御方拙者方へ御返却可被成候、以上、

二月六日　戸川日向守

九人宛

久須美六郎左衞門殿

臨時廻り

御先手衆

池田播磨守

各樣御組市中見廻り先、辨當焚出方之儀、兼る御打合濟之趣ヲ以、手筈申渡置候處、別紙之通名主共申立候間、万一早盤木打、非常之場合ニ至り候節ゟ、見込之通相心得取計候樣可申渡ゟ存候、然ル處凡人數之目當無之るゟ焚出等差支候儀ニ付、供小者共ニ至迄場所分いさゝ、一日分出人數高御取調被御申聞候樣存候、依之別紙辨當引替紙札幷名主共差出候書付相添、此段及御掛合候、別紙ゟ御返却可有之候、以上、

久美須六郎左衞門書翰

辨當焚出ノ件

辨當札

寅二月

戸川日向守樣

久須美六郎左衞門

池田播磨守ゟ別紙壹通壹冊差越候間、寫相廻シ申候、御順覽之上拙者方ゟ御返却可相成候、且外ニ辨當札壹枚差越候間、是又相廻申候、早々人數御取調之上、拙者方ゟ爲御持被遣候樣存候、以上、

二月六日

猶以辨當札も是又御返却可被成候、以上、

壹人前　（印）

辨當札程村紙

名主共差出候帳面、

市中之儀當時平穩ニ御座候得共、万一此上兩御組御地向御役人樣方、嚴重御廻り有之候節、御廻り先ニ る急場辨當配り方手配、左ニ奉申上候、

一焚出竈元ゟ下町貳ヶ所程、山之手貳ヶ所程ニ る焚出ー紙包振飯（梅カ）梅干味噌相添、左之場所

江戸相廻置候積り、

南御番所御腰掛
北御番所御腰掛
芝口壹丁目西側
自身番屋
南小田原町二丁目
自身番屋
芝
西應寺
芝田町七丁目
八幡境内
品川千躰荒神
海雲寺
麻布
善福寺

青山久保町
梅窓院
麹町平川町
天神境内
兩國
回向院
同所西橋
番所
淺草
淺草寺
神田明神
境内
下谷坂本
小野照崎
境内

右場所江、目印ハ長竿江生笹を結ひ付高く差出置、何レ茂此ケ所寄寄々髪結共爲相詰、
御中間等辨當請取方相印之御印符壹枚御壹人宛行之積りニる握飯相渡、御印符と髪
結帳元請取置取揃、御番所江返上可仕事ニ打合可仕哉、下町山之手焚出竈元ハ辨當所
十九ヶ所江、配り方ハ市中餅屋共常々强飯持運候小荷イ桶江竈元ニる詰、髪結共江相
渡、髪結之内帳元共辛飯いさー、御用印紙ニ印候る、荷イ桶江相詰相配り候、

小石川　傳通院
同所　白山權現
境内　牛込御さんを町
南藏院
境内　深川寺町
玄心寺

但、十九ヶ所寄寄御見廻り御人數九之處、御役人樣方ハ兼る御達ニ爲在候樣仕度□
□人數目當配り方不仕候□□□□ニ日々相殘り、又ハ不足致ー候るハ不辨利ニ付、
此段申上候、

一白紙江きふふ□振蒔握飯梅干を添、壹包を御壹人前ニ仕立候積りニ御座候、
但、みそ握飯へ添包候るを見苦敷相成候ニ付、十九ヶ所辨當所江みそ差置、御好有
之候へハ、御人數見積りニ紙包ニいさー、相渡候積り御座候、

一御辨當湯茶ハ、御廻り先番屋ニる差出候積り御座候、

一白米米問屋共方ハ竈元江持運ハ、大道春人足相用候積り、是ハ本八丁堀壹丁目仁兵衞
店常右衞門其外ハ爲冥加、人數百七十人勤方願書差上候間、此者共ニる竈元手傳爲仕
可申積り、
但、焚出竈元ヶ所多々相增候節ニ至り、手廻り兼候得ハ、混雜杜氏爲手傳候積り、是
ハ南紺屋町兵右衞門店佐吉外貳人、冥加勤寄子百人可差出旨、願書差上候、

右之通手配り見込奉申上候、尤焚出請負、白米梅干ハ兼る密々心當仕置候、以上、

寅二月　堀江町名主　熊井理左衞門

長谷川町名主
鈴木市郎左衞門

一右ニ付、左之通人數取調、戸川日向守方江相達候、

紅林勘解由
同人家來
用人　壹人
中小性　貳人
徒士　貳人
中間　貳拾人
夜中挑灯持共
都合貳拾六人
同人組
與力　五人
同人
小者　拾人
同人組
同心　貳拾人
都合三拾五人
惣合人數六拾壹人

紅林勘解由

町奉行ヨリ臨時見廻中止ノ達アリ

紅林勘解由廻狀

臨時見廻中止ノ件

右之通人數取調御達申候、

二月

一同七日、自分詰番當前ニ付、登　城致候處、町奉行池田播磨守ゟ達ニ付、今夜ゟ臨時廻り相止候旨申聞候間、退散之上、夫々江及文通候、

以一紙致啓上候、然ル今七日拙者詰番ニ付、登　城致一候處、市中も彌平穩ニ付、今七日夜ゟ臨時廻り先ッ相休候樣、伊勢守殿江伺濟之上相達候段、池田播磨守申聞候間、今晩御見廻り不及候、早々御順廻可被成候、以上、

二月七日

本多左京樣

紅林勘解由

紅林本多連署廻狀
臨時廻中止ノ件

松平藤十郎様
内藤甚左衛門様

一同日、池田播磨守ゟ達書差越候處、翌日廻狀緘添ニ付、略之、

一同八日、

追啓廻狀致貳觸候、

以廻狀致啓上候、然ゟ昨七日勘解由詰番ニ付、登　城致一候處、臨時廻り之儀ニ付、池田播磨守ゟ之伺書ニ、伊勢守殿御書取添爲心得爲見セ候間、寫取則相廻申候、猶又昨夜播磨守ゟ達書差越候間、今朝遠藤但馬守殿ニ御屆書差出、右寫共三通別紙相廻申候、尤兼ゟ伺濟之通中之口上り中之間入御臺所頭等ゟ、是迄之通居置可申、日々詰番之儀ゟ如何可心得哉之旨、久須美六郎左衛門ゟ但馬守殿ニ相伺候處、先不及其儀、早急御用之節ゟ中御門當番ニ御達可有之旨、御同人御沙汰之由、六郎左衛門申聞候、依之臨時廻り之儀も、昨七日夜ゟ相休候様、昨夕廻之御方々ニゟ、以別紙申達候、早々廻狀御順達、留之從御方左京方へ御返可被成候、以上、

二月八日

紅林勘解由
本多左京

町奉行伺書
先手頭ノ臨時廻中止ノ件

八人宛

猶以桁入之儀、議定掛月番野間忠五郎ニゟ、以別紙申達候、以上、

伊勢守殿、

異國船近海ニ乘入候ニ付、御先手頭四組ッヽ、日々順番ニ相廻り候積、申合可然旨御先手頭ニ相達候段、去月廿九日申上置候處、亞墨利加船横濱ニおゐて應接ニ付、諸家御固も被　仰付候ニ付ると、市中人氣爲彌平穩ニる、爲差火事沙汰も無之、右御先手頭四組臨時廻りと先ッ相休候様可申達哉、猶廻り之儀此上之仕儀次第申上候様可仕候、此段奉伺候、

二　月

覺

伺之通相心得、御先手頭ニも可被達候、

池田播磨守

老中指令

安政元年二月七日

紅林勘解由殿
金田式部殿
川井攝津守殿

池田播磨守

町奉行通達

異國船近海江乘入候ニ付、各樣四組ツヽ、日々順番ニ御廻之儀及御達候處、亞墨利加船於横濱ニ應接ニ付、諸家御固も被　仰付候ニ付ると、市中人氣も彌平穩ニる、爲差火事沙汰も無之ニ付、各樣四組臨時廻りと先ツ御見合可被成候、猶御廻方之儀と此上之仕義次第可及御達候、右ハ伊勢守殿江伺之上、此段及御達候、早々御同役衆江御達可有之候、

二月七日

但馬守

臨時廻中止ノ件

臨時廻之儀ニ付申上置候書付

御先手

先手頭上申書

私共海岸筋見廻之儀、市中も平穩ニ付、先ツ相休候樣、池田播磨守ハ伊勢守殿江相伺候處、伺之通被仰渡候段同人申聞候間、昨七日夜ハ見廻り相止申候、依之此段申上置候、以上、

二月八日

本多左京
紅林勘解由
金田式部
石川將監
永井能登守
坂井右近
松平藤十郎
戸川日向守
川井攝津守
内藤甚左衞門

臨時廻中止ノ件

一右ニ付、二月九日、中御門當御番川井攝津守ハ桁入ニ相成候、
一同七日、中御門廻狀之内、當番山中又兵衞、（先手鐵炮頭）

紅林勘解由

安政元年二月七日

臨時廻中止ニ付桁入ノ件

御殿江被罷出候處、市中穩ニ付晝夜廻り先今日ゟ相止候旨、伊勢守殿江伺濟之段、町奉行池田播磨守相達候旨、勘解由當所江立寄被申聞候、

一同八日、中御門廻狀之内、當番淺香傳四郎（先手鐵炮頭）、

昨日廻狀之通、拾人衆市中廻り相止候ニ付、日光　御參詣之節御供之例ヲ以、拾人以上桁拔之節ゟ、休日數無之、翌日ゟ直ニ桁入ニ付、此度も右之例を引當休無之、拾人衆明九日ゟ先前之桁ニ相成、明日當所當御番川井攝津守、平川口御門當御番石川將監、坂下御門當御番内藤甚左衛門、當前之通被致出勤候樣、銘々江以別紙申達、右組々江ゟ拙者組ゟ爲致通達候、尤前書可取計旨、議定掛月番衆ゟ被申越候、

一同九日、

伊勢守殿御渡ー、

亞墨利加船渡來ニ付心得方之儀、去十一月重キ

上意之趣被　仰出も有之義ニ付、諸向共聊油斷ゝ有之間敷候處、此節數艘近海江碇泊致ー候ニ付ゟ、此上應接之模樣ニ寄万一彼方ゟ兵端を開き候儀も無之ゟ難申、其節一同奮發致ー候義ゟ申迄も無之事ニ候得共、異船滯留中御備向之儀、外見而已ニ拘り、夜中も海岸江挑灯等數多付置候向も有之趣相聞、左候ゟ彼之的ニ相成、且ゟ疲弊も不少義ニ付、固人數差出候面々番小屋等之要所ゟ格別、其外ゟ要害之土地見計山陰木陰等江屯致ー置、可成丈外江ゟ不見へ樣相心得、行列を正ー晝夜時々海岸を見廻り可申候、且又宿驛人馬遣方之儀も可成丈致勘辨、相減シ候樣可致候、尤銘々屋敷々江ゟ手勢用意致ー置候義も右ニ准ー、外見虛飾ゟ一切相止メ、士卒之鋭氣を養ひ候ゟ取慎り居、大小之筒配り方之儀ハ勿論、劒鎗手詰之勝負等、實地之接戰專一ニ可心掛樣精々厚可申付候、

但、大艦ヲ始諸般之御備向相整候上ゟ、猶改ゟ被　仰出候品も有之儀ニ候得共、方今差向候場合ヲ以、右之通被　仰出候事ニ付、面々必死之覺悟を盡ー、實用之工夫可致候、尤彌彼方ゟ兵端を開き候節ニ至候ハヽ、小船を以神速之勝負ニ及候義ニ可有之候、

右之通万石以上以下、不洩樣早々可被相觸候、

二　月

一同日、

異國船渡來中、若　御城爲御警衛寄場相立候節ゟ、夫々於場所々御扶持方御賦等被下候ニ付、右之場合ニも臨候節ゟ、

御城内相詰候者、平常御臺所不被下候向ニるも、非常之儀ニ付、
御殿江相詰候者ニ御湯漬其外御賦ニ准ー被下候旨、但馬守殿江伺相濟候ニ付、人數書
早々
御城拙者共江御差出可有之候、依之申達候、以上、

二月九日

岩瀨修理
永井岩之丞
堀織部

一同日、
伊勢守殿御渡ー、
亞墨利加人江明十日應接有之候ニ付、船中ニる祝炮數發相放候旨申立候ニ付、右炮聲
承り候とも動搖致ま間敷候、併彼方事情も難計ニ付、其心得ニる油斷ま無之樣可被致
候事、
右之趣向々江早々可被達候事、

二月九日

一同日、此度市中臨時廻り先ッ相休候樣、池田播磨守ゟ達ニ付、三ヶ所詰番ま難相心得旨、
議定掛月番（先手鑓奥詰）野間忠五郎江、本多左京方ニる及掛合候處、承知之旨ニる直ニ助立ニ相成
候、
一同十日、議定掛り三人江、左之通掛合文通差出ス、

戸塚豐後守樣
野間忠五郎樣
遠山近江守樣

本多左京
紅林勘解由

以手紙啓上仕候、各樣彌御壯健被成御座珍重奉存候、然ま臨時廻り先ッ見合候樣伊勢
守殿御沙汰ニ付、相止候間、御番桁入之儀御達申候、拾人以上ま休無御座候由ニる、日
光御參詣之節之例ヲ以御取扱之儀承知仕候、然ル處天明七年五月臨時廻り拾人被
仰付、右相濟、休相立申候、尤休之有無ニ拘候儀ニと無御座候得共、拾人以上休無之ゟ
申儀ニるま、既ニ先例ま有之候儀ニ付、臨時廻り相勤候者、後々舊記ニま相成候義ニ
付、此段御問合可申候、右可得貴意如斯御座候、以上、

二月十日

一同十一日、左之返書遠山ゟ來ル、

見廻中止ニ關スル掛合

本多紅林連署書翰

臨時廻中止後休日ノ件

議定掛月番書翰

本多左京様　戸塚豐後守
紅林勘解由様　野間忠五郎
遠山近江守

御手紙致拝見候、然ル臨時廻り先御見合ニ相成、御番桁入休之儀御達有之候處、日光御供之例を以取扱、拾人以上休無之旨御達申候處、天明七年五月臨時廻り拾人被　仰付、右相濟休相立旨被　仰越致承知候、然ル處寛政以前迄ハ甚不取締不極ニ付、寛政四年松平越中守殿御改正ニ付、御先手議定掛相立候ハヽ之例、右掛ニ付相用、寛政以前之例相用不申、天明七年ハ拾人之内四人御勤ニ御座候哉其所致承知度、此度ハ拾人ニ付四人廻り六人非番有之、御番方も貳拾三人之内四人煩引ニ付、拾九人ニ付御番所八ヶ所八人勤ニ付臨時廻ハ非番少く、其上組與力同心助込、明ヶ方詰切助ニ相成、三日居越勤致候ニ付、臨時廻り拾人休相立候得ハ、御番方も休相立不申候ハヽ不相當ニ付、旁休立不申候間、天明七年四組廻り之節、否致承知度、其上御挨拶ニ及可申ち存候、右御報可得御意如斯御座候、以上、

二月十一日

臨時廻先手頭通達

猶以、各様彌御壮健被成御座奉賀候、以來御掛合有之候ハヽ、議定掛月番之者ハ御掛合之方ち存候、以上、

一同日、御目付三人ハ左之通左京方ハ相達ス、

御先手

小札
堀織部殿
永井岩之丞殿
岩瀬修理殿

臨時廻り
御先手

本多左京
紅林勘解由
金田式部
石川將監
永井能登守

湯漬給與辭退ノ件

右ゟ異國船渡來中、若　御城爲御警衛寄場相立候節ゟ、夫々於場所々御扶持方御賦等被下候趣御達ニ付、右之節ゟ拙者共拾人市中見廻り不申内ゟ、當番之外御殿江相詰候ニ付、御湯漬御斷被仰達可被下候、依之御達申置候、以上、

二月十一日

堀織部殿　坂井右近
永井岩之丞殿　松平藤十郎
岩瀨修理殿　戸川日向守
川井攝津守
内藤甚左衛門

御先手

坂井右近狀

一同日、

追啓廻狀致貳觸候、

以廻狀致啓上候、然ゟ御勘定組頭後藤一兵衛ゟ、別紙壹通差越候間、寫相廻申候、右之趣御取調御下ヶ札こる被仰聞可被下候、取揃相達可申候、廻狀早々御順達、留之從御方御返ー可被成候、以上、

二月十一日

平川　坂井右近
此方　石川江遣ス

御勘定所

勘定組頭通達ノ件

勘定所問合書

御先手衆

御先手

石川將監
永井能登守
坂井右近
本多左京
紅林勘解由
金田式部

臨時廻先手頭組與力同心人數ノ件

右御組々與力同心人數承知致一度候事、

二　月　　松平藤十郎
　　戸川日向守
　　川井攝津守
　　内藤甚左衞門

此方下ケ札、

組與力五騎同心三十人、定人數之處、市中臨時廻り中ゟ、
　　與力　五騎
　　同心　貳拾人　ニる相勤申候、
　　二月十一日　　紅林勘解由

臨時廻勤務ノ與力同心人數

議定掛月番相談書

二月廿四日夜、石川ゟ到來、翌廿五日、川井江順達致ス、
以廻章致啓上候、然ゟ先達る當番桁入之節、詰番割出申候處、御警衞相立候節ゟ、
御城江御詰御組ゟ頭々宅江相詰候ニ付、詰番難被成御心得旨御斷ニ付、當月ゟ先除キ置候得共、來月之詰番も相除置候ゟ差支候ニ付、猶及御掛合候、先頃臨時廻御内意中詰番御斷之趣相伺候處、尚又及御掛合候る可申上旨被仰渡候ニ付、再應及御掛合候、來月之詰番割出一被成御心得候哉、御斷ニ有之候哉、御斷ニ有之候ゟ、別紙之通可奉伺ゝ存候間、此段及御相談候、否御挨拶承知致一度、御名之下江下ケ札ニる可被仰聞候、廻狀早々御順達、留之從御方三人之内江御返可被成候、以上、

來月ノ詰番ノ件

二月廿四日　　遠山近江守
　　野間忠五郎
　　戸塚豐後守

議定掛月番伺書案

拾人宛

（朱書）「伺書案」

御先手拾人臨時廻被仰渡、町奉行池田播磨守ゟ先四組被申合候る、市中相廻候樣申聞、
正月廿八日ゟ四組相廻り、六組非番御座候處、二月七日ゟ先見合候樣、伊勢守殿江伺
濟之趣、同人申達候ニ付、當番桁入休之儀取計候樣、議定掛私共江申聞候處、七人以上

休之近例無御座、日光御供之例ヲ以休無御座候段申達、御番桁入申達相勤候間、西丸和田倉詰番之儀も番桁ニ入候上ハ、無子細儀ハ割出申候處、御警衛相立候砌ハ、臨時廻拾人ハ頭々　御城江相詰、組ハ頭々宅江相詰申候間、詰番之儀難心得候之段斷申聞候間、先當月之詰番ハ相除置申候得共、万一之節ハ當番及詰切罷在候儀、當番之組も御番所ヲ明ケ、頭宅江相詰候儀相成間敷、左候得ハ詰番迚も御警衛第一之儀、難心得ハ斷申聞候ハヽ、不都合之次第ニ奉存候、其上拾人御番除ニ相成候ハヽ、當番詰番ニ組數引足不申差支申候間、詰番ハ相心得候樣仕度旨申上候處、臨時廻之方江及掛合、猶又申上候樣被仰渡候ニ付、猶及掛合候處、彌以難相勤旨申聞候間、此段申上候、

右組數引足不申差支申候譯ハ、御先手加役壹組除三拾三組之内、臨時廻十組除候得ハ、殘二十三組ニ御座候ハヽ、御番所八ヶ所詰番四ヶ所都合拾貳組相勤、代り候組ハ十一組ニハ壹組不足ニ相成申候、詰番ハ當番ニ相成申候ニ付ハ、御道具宅江持歸り、夫ハ當番ニ罷出申候間、遲刻及可仕、且壹組不足之組江ハ、當番ハ詰番ニ代り合仕候ニも、一旦宅江罷越不申候ハヽ、御弓鐵持參仕候事故、是又遲刻ニ及可申、當番ハ詰番ニ相成、詰番ハ當番ニ相成候儀故、何レニ仕候ハヽ御道具之持運ひ等手間取、萬一詰番當番之方明キ可申、彼是差支申候、且他之間も餘り御手薄ニ相聞、不宜儀ハ奉存候ニ付、臨時廻ニハ隔日ニ替々一組詰番相勤候樣、及掛合候處、不承知ニ付、不得止事捨置候得共、當番加番相勤候上ハ、詰番之儀も相勤相當之儀ハ奉存候、右之通再應及掛合候得共、承知不仕候上ハ不得止事奉伺候、以上、

二　月

御先手議定掛

戸塚豐後守
野間忠五郎
遠山近江守

紅林勘解由答書

御廻章之趣致承知候、臨時廻り心得申詰番之儀、早盤木等ニ無之候ハヽ、並之通相心得可申候、若早盤木打候ハヽ、兼ル御達申置候通、御殿江相詰候間、其節ハ俄助御心得之方有之候ハヽ、御差支無之儀ハ存候、依之、以下ヶ札及御答候、

二月廿五日

紅林勘解由

下ヶ札

一二月廿七日、伊賀守殿御渡ー

安政元年二月七日